

るまい。生きて居る限りは何か彼か蒼蠅に、相違はない。其蒼蠅の人間の間、眞面目か知れぬが、我は厭だ、うるさいくくく厭だくく厭だ。此繁を逃れるのは死んでしまふより外に仕方がない、と露石は考へた。人間は極單純なる物だ。それを骨を折つて皆で寄つて集つて、むつかしく仕て、しまふのだ。我は厭だ、死ぬ、死ぬのが一番安樂だ。何故早く我は死な、かつたらうか、と露石は考へた。

今は世の中に心が、りは無、唯乳母への名残が惜しまるゝのみだ。春の夜の月に歩いて露石はどぼくどぼくど行く、道は山につづく處で切れて居る、雜木を分けて上るに、路らしき路を見出した。まかし人の通ふ路ならで、山犬の兎を取りに登るのか、樵夫漸くにして通ずる位。

構はず露石は上つて行く、谷底よりは次第く遠くなるに關らず、溪流の水聲は益々高く響く。露石の心は一步一步高くなるに連れて桂を攀ぢて月宮に上るの感を生じ、未だ人界を離れぬか、未だ天上に達せぬか

と思はれる、が、足下の溪流は依然として地球の音である、頭上の峰の松風も亦其音である。未だ塵界を離れ得ぬか、少しも早く我は死なんと急いで急坂を上りかける。けれども仙人ならぬ露石、息切れて苦しさは堪へがたし。

漸くにして其頂上に達した。

其頂上より谷底を見下せば、能くもまア登つて來られたと驚かれる。實に絶壁此所は千丈、削りなしたる岩石は根から頂きまで眞直ぐである。隴の月にすかして見れば、日陰谷の人家は全く没して雲か、抑も湯の烟か、朦々たる中に點々たるは湯宿の燈火か。

仰いで空を見れば星あり。天上に湯宿やある。扱ては湯の烟か、白雲か、夜の霞か。

此景に對して露石は少時突立つて居た。感むらくと起らんとするの時、何を今更思ふべき。此絶壁より飛下りて微盡に碎けて死なんと覺悟を定

めでは、一つの躊躇もあるべきでは無い。身を躍らして絶壁を飛下らんと、岩の上から足を。岩でさへ碎けべきを、人の、何んの、さりとと舞下る一段の下に、横に生えたる捻け松。露石はそれに引掛つた。これより先きに掛つて居た木の葉は、此響きでちらく〜と舞下る。露石急つて身を落さうとすれど、袖や、帯や、引懸つて、無心の松に留められた。恰も油畫にある繭枝の小鳥がぶら下りながら藻掻いて居る観がある。最早や死したるべき筈の露石、考へまじとて飛下りたるのに、松に懸つて如何も成らず、落ちやうとしても落ちられず、考へまじとしても考へるやうに成る。

見下す方が谷底か、見上ぐる方が天上か、それとも下のが星であつて、上に見えるのが燈火か。夜の霞か、湯の烟か。

身を落下さすれば身は死すべし、我は心を墮落さして生きやうとは思はぬ。飽くまでも此絶壁より身を投じて死すべきなり、と露石は斷じた。

脊おとろへたる躰にあらん限りの力を入れた時に、露石に似たる松ヶ枝は折れた。落ちたのは霧石か、松ヶ枝か、残つたのは露石か、松の根か、春の月は隴にして絶壁を照らすに光鈍し。

(七)

岩に頭を打ちて脳を痛めたる露石、身を殺さんとして心を殺した。人より秀れたりと思ふ詩想を貯へて居たのが、今は人より遙かに劣つて、これまで自分の歴史を忘れ盡して、苦もなし、樂もなし、何も彼も忘れ盡して、只生きて居るといふ計だ。其苦もなく樂もなのいが露石の一度望んだ處だが、其望の處まで達して居る事も最早や分らない。傍に居て朝夕信切に介抱して、名ばかりの妻たるは、彼の阿賤であるといふ事も分らない、分らないのでは無い、分つても阿賤を妻とすべきではないと前には退けた、事が分らない。

住むは君子の邸内で、林の中の田畑の一隅、小川もあり、竹藪もあり、
 花園もあり、誠に閑静なる一軒家。日々の事を同家から賄はれて居ると
 いふ事も分らない。

そして筆と硯は流石に放さずに、何か連りに書き散らして、阿賤に見せ
 時々訪問する君子に示し、これを彼の日陰谷の乳母に聴かせた如く讀ん
 で聴かせる。涙を以て子供の保をする如くに聴く兩女、彼は愛情の深か
 りし人の爲めに、彼は前途多望なりし詩人の爲めに。

(をばり)

氷
 室
 守

岩を穿つて石で疊んだ十坪ばかりの水溜池が、山と山との間の細谷、其
 所に三個三段に並んで掘つてある。上の中のと下のと、小さな埋樋で
 水の通ひは出来て居るが、上の水溜には、岩から岩を傳ふて、瀧でもな
 く川でもなく、ほんの清水のちよろ／＼雫を、青竹の筧で引いてある。
 下の水溜の隅の方からは、恰似、上の溜へ落込むだけの少量の水が、總
 ての枯草の其中にこれのみは蒼々として居る石膏の繁茂の中に流入つて
 居る。之のみで、三個格別の相違はない。いづれも杉の丸太を倒して、
 十文字に歩桁を渡して、そして樋口に竹簾の塵避け廻はしてある。
 此水溜は養魚場かと思はるに、魚一尾も居らぬ、木の葉一枚浮いて居らぬ。
 深くもない底は殊に綺麗に見えて居る。其所には小石一ツ沈んで居らぬ。
 其筈だ。

中の水溜の端に、雌へもたれかけた一軒の小家がある。内には若者が一人居て、それが不絶溜の周囲を廻はつて、歩桁を残らず渡つて、長手の網で塵を抄ふて居る。風が吹いて過ぎると直ぐに出る、それは枯葉が舞込む故に。鳥が鳴いて飛ぶと直ぐに出る、それは抜毛が落入る故に。斯くまでに心を盡して、何の爲め水を溜めるのか。これは氷を造る爲にだ。さればこそ日光の射さぬ谷隈を撰んだ、水の清く冷めたき山間を擇んだ。里よりも山は、山の中でも殊に寒い此所を、昔から人の呼んで氷室谷と傳へて居る。

氷室谷の名から思着いた麓の村の山路某が、一歳こゝろみに此所へ氷造池をしつらえた。然るに意外の好結果で、其筋の試験を受けた處が、飲料に適するといふので、それを其夏、山の上の温泉場へ避暑に来る遊客に賣つて、少からぬ利益を得た。其次の歳は水溜を一個殖した。二倍の利益を其夏は得た。又次の歳は一個殖したが、今度は三倍の利益を得る

事は難くて、やうやく最初の儲けただけしか得られなかつた。それは試験の結果、飲料には成らぬといふので、山國へ運ぶ魚詰の料に、捨賣にしたからである。

それでなかつたなら、今歳は水溜が又一個ぐらゐは殖えて居たらうに。つまり飯料に適しなかつたのは、水質の不良なのではない、塵芥の多いからであつた。番人を選んで、充分に注意させるに加くはなしといふので、今年はその長男の要太郎を此所へ詰めさせた。

それは親身ではあるし、備人とは違ふて、利害を最も密接に感じるので、責任は何處までも盡すだらうといふ點もあるし、又算盤の上から見ても、格別の給料を出すにも及ばぬといふ點もあるし。それで親はそれと極めたのである。

此他に又一ツの適當なる點がある。それは此要太郎は子供の内から病身なので、手荒な耕作も出来ねば、静座して學事を勵むといふ根氣もない

のだ。それで此頃では廢嫡も同然。いづれ本家の農業の方は、次男の某が繼ぐべき評議の折柄。父は此水事業が盛大になれば此方を要太郎に遣らして別家させやうとの腹のあるので、それでだ。

のみならず、此要太郎は、現在血を分けられた父母に、子供の時からどくししいので、そればかりでもなく誰にでもうどくししいので、日頃から人の居らぬ方へ人の來らぬ方へと廻つて居て、滅多に顔を合せぬ、口を開かぬ。故に知らぬ者は繼兒かともいふ。けれども然うでない。白痴かともいふ。然うでもない。狂人かともいふ。偏屈かともいふ。両親はこれは病身なる所爲といふて居る。其處で、此水溜の番人には、父母も勧め、自らも進んで、淋しい水室谷の小家住居とは爲つたのである。日出も日入も知る事の出來ぬ谷影に、今日も亦鳥も歸らず鐘も聽えず、静かに、いと静かに、淋しさの極を以て日は暮に掛つた。

要太郎は例の如く、長手の網を持つて小屋を出て、歩桁を先づ上の水溜

から傳ひはじめて、少しばかりの塵も見残す事なく、中のも、下のも、見廻つた。

溜の面には、漣を更に千分したやうな水皺が立つて居て、未だ氷らぬ。笥から漏れて居る邊には、水晶の瓔珞と見見る氷柱が、幾本もなく釣下つては居るけれど、上の水溜が鏡の様に張詰め、次ぎに中のが半分氷で封じて、その上面に、上の方から流込ひのが氷りながら擴がるやうになるまでには、未だ中々だ、況してや下の水溜までが氷切つて、落水が絶えるまでになるには、爰四五日の間があるのだ。

今宵も空しく星影を寫して、氣まぐれの小鴨が泳ぎに来るのか。翌日の朝起きて見ると、歩桁にはばかり霜が積つて居て、薄氷だも張つて居らぬ時には、棧道を行く炭かつぎの男供が『一昨年儲けたので、今年水神様が腹でも立てさッしやツたか、一向に金子を氷らされぬの。此様子では氷室が明家で淋しかんべいから、雪が降つたらそれでも積める事だ』

なと、言ふて行く悪口を聴くのが、厭な事だ。これよりは、山芋堀の子供等が、小石やら松子やらを投込んで行く方が、未だ仕末の好い。人に好かれ悪かれ噂を爲れるのが厭でならぬ、と要太郎は思ひつゝ、又本またもとの小家へと戻つた。

米は我田に弟等の作つたのを、水はおのれの今氷るのを待つて居る水溜みづたまりから酌んだのを、共に加減して鍋に入れて、薪木は裏から折來つたのを焚き、おぼつかなき夕の飯を、自在に據りて炊きはじめた。折柄、突つとして飛込んで來た一人。

鍋の下に燃盛る火の影で見れば、十六七の娘、山家の女の多くは色白いろしろの其中でも、別して色の白いが、これは又如何したのか、濡鼠に濡れて、頭の髪からも、衣服の裾からも、雫が滴々と落ちて居る。

「又裏の崖から岩が崩れて落込んだのかと思つたら」と要太郎は言つた。「妾が來たので驚いたのでせう」と言ひながら娘は、すか〜と圍爐裏

の傍まで來た。

「如何したのだね、お米さん」と要太郎は問ふた時に、娘はづけ〜と答へた「妾は身を投げたの」

「えッ、身を投げたの。如何してまア」と流石の要太郎も驚いたが、それは何故と問掛けるよりも、鍋の飯の吹出して蓋を持ち上げるのを直す方に、意を用ゐる手を遣るのが急で、其方に従事した。お米と呼ばれた娘は寒さに、冷めたさに、濡れて居る衣服をいつまでも着て居られず、帯も解き、衣服も脱ぎ、そして無遠慮に上へ通つて、蕙屏風に引掛けてある要太郎の寐衣を取つて着て、未だ戰慄ながら火の前へ來て暖まつて居る。要太郎は鍋を自在竹から脱して、今度は土瓶を掛けた、湯が沸くまでには飯が蒸れるだらうと、それを待ちながら「お前は御飯を食べて來たのか」と言葉ことばを掛けた。

「御飯どころではありません、妾は今身を投げたのですよ」と押付おしつけに身

投を吹聴した。

要太郎は粗朶を折るのに面倒臭いといふ顔をして、それを火に投じながら、「如何して死ぬ氣になつたのだね」

「でも、種々な事が持上つて来て、面倒で面倒で、もうこんなにかんがらかつて仕まつて、妾には逆も遣切れなくなつて仕まつたから、蒼蠅、最う世の中は、こんなは何や彼がむづかしくなつては、妾には如何しても仕末がつかないから、一層のこと死んだ方が好いと思つて、それで七折淵へ身を投げて仕まつたの」

「さうかね」と氣の無い受で、それが何故死なずに助かつたとも根を掘らぬ。調子が合ひかねたが、お米の方から語出した「だが、全く死神が離れたのですね。妾の運が好かつたのですね。一度洗んでね。浮上つた時に、不圖死ぬのが厭になつちやつて、ばちやく仕て居る内に、浅い處へ着いたので、急いで、廬上つてそれから濡れたまんまで此所まで來

たのですよ。いえね、家へ歸ると呵られるからね、峯寺の御友達の處へ行つて泊つたつもりで、翌日の朝歸れば好いのですから、又今夜も泊めて被下いな。然うすれば、今夜中に衣服をすツかり乾して行きますから」

「お前は、それでは、本統に死たくなつて身を投げたのではないのだね」と向直つて要太郎はお米に問ふた。

「妾は、あの全く夢中だつたのですねえ、いえね、時々あるのですよ。物がむづかしくなつて、いろんな事が重合つて來ると、最う面倒臭くなつちまつて、死んで仕まつた方が好いと思つてね、今夜も然うだつたのですよ。彼が悪いのですね、目が眩んだ様に何も分らなくなつちまつて、むらくツとして死ぬる氣になるのですねえ。でも今夜の様に本統に身を投げたのは初めてですよ」

「最うお前は死ぬ氣はないかね」と要太郎は更に問ふた。

「厭、厭、厭なことだ。妾は、何故妾は、彼様氣に成つたのでせう、思出すと、おう、可恐」と身ふるひを仕て、益々圍爐裏に身を寄せた。

「お前は死たくなる事が時々あるかね」と要太郎が問を重ねた時には、膳を出して、茶碗を出して、鍋の蓋を取りかけて居た時だ。お米はそれを自分が引受けて御給仕は妾が爲るといふ風情で、飯を盛つた。

何故又死ぬる氣に成つたのか、種々な事が重り合ふて物がむづかしくなつて來たのか、蒼蠅いといふ其事情は何んであるかと、問ふであらうと思つた要太郎は、さつさと飯を掻込んで、一言もこれに及ばぬ事の意外さ。

仕方がないから、お米の方から語出した。それを説明し終らねば、物も食はぬと奥の齒に楊子が欲しい様な心持で、如何も氣が納まらぬからであらう、「聽いて被下い、斯うなのですよ、此年末になつてから家の御父さんが、急に仕事がなくなつて仕まつたのですよ。彼の電氣鐵道とやら

が出来たものですからね、道の悪い處を、割に高い御錢を出して、そして時間が倍の倍も遅くかゝるのに、誰がまどろしい、腕車なんかに乗るもんですか。妾だつて厭だわ、寒いのに。だから家の御父さんは、仕事に出たつて客はなし、出ない方が氣がきいて居るので、家に一日居るのですよ。それが唯音無しく仕て居るのなら、未好いのですが、躍起當りに妾達を呵飛ばしたり、御母さんと喧嘩したりね、それで有りも仕ない中で、朝から晩まで酒なのですよ………」と言つて一息吐いた。

「いつかですよ、それは妾達の小さな時ださうですが、本街道の峠を越す人がなくなつて、新道を腕車で行く客ばかりになつた時にも、御父さんは駕丁が暇になつたものだから、又自棄を起して、無闇に酒を呑んで、姉さんや兄さんを叩んなさつたさうですよ。でも其時は、御金子を出して、腕車をこしらえて被下つた方があつたので、それでまアやつと

眞面目に復つて、此間まで續いて稼いで居るので、汽車が出来ては最う駄目ですわ。汽車をこしらえて御父さんに借して被下る人は、有りや、仕ません』と言つて、少しく涙含んだが、でも其饒舌はひるみなく續けて、『悪い時には悪い事が重なるもので、水車場へ手傳ひに行つて居た御母さんは、坊を負つた儘、白の中へおツこつて、坊は手を、御母さんは肩を、杵の先で搗かれて、酷い怪我、矢張家の事が心配なので、氣が其方に引けて居たものですから、自然に油断をして居たのですね。不幸福はこれだけで最う澤山なのに、東京へ奉公に行つて居る兄さんは、店の金子をつかひ込んで、行方知れず、山の上の温泉場へ女中に行つて居た姉さんは、ぶつ／＼顔から喉へかけて、赤い大きな腫物が出来て、氣分が如何にも悪くつて、迎も辛抱が出来ないといふので、歸つて来て寝て居てだし、ほんとに妾はくさ／＼として仕まつて、妹と二人で薪木を拾つて驛へ賣に出た處が、多寡が知れて居るし、最う／＼／＼

403 守 室 次

／＼如何したら好いだらうと、困り果て、居るのですよ。そればかりにやアありません、大變なのですよ』と言掛けたが、要太郎が三碗目の飯を自分で盛りかけて居たので、急いで、それを取つて、給仕しながら『大變なのですよ、湯宿からは毎日々々人が来て、肝腎の歳暮から正月へ掛けて引込れては困る。何の爲に裏枯の閑の時に遊食をさして置いた。東京横濱から年禮のがれに来る客の多いのは、知切つて居るのだ。言は書込みの一月を、寝られては手が足なくつて、困るから是非共姉さんに歸つて来いといふのですよ。でも病氣で寝て居るのですから、無理でさアねえ。それも向ふで醫者にでも見せて、薬でも飲んで呉れるのなら好いのですが、そんな事は仕ないのですよ。そして彼の温泉が蘆の湯か草津の様な湯なら、好いのださうですけれども、姉さんの病氣にはさかないのですよ。無理でさアねえ』と言つて涙を拭き『未だ無理なのは斯うなのです、いよく姉さんが来られないのなら、二年分の給料の前借

を、たつた今耳を揃へて返へせつて、無理でさアねえ。それが如何して出来るものですか、知れ切つて居るのに悪催促して、揚句の果にはね、姉さんが来られなければ、妾を代りにといふのですよ。妾が代りに行きさへすれば、姉さんの前借は其儘の上に、何程か別に貸して遣るといふので、御父さんは大喜び、是非妾に行け行けといふのですよ。妾だつてそれが當前なら、家の爲ですから、厭應なしに行きますが、段々姉さんから聽いて見ると、決して湯場女なんかになるものではないつて、姉さんが涙を滴しての話、妾は如何しても、要さん、妾は如何しても、行くのは厭です。何んば家の爲だからつて……」

此時、三碗目の飯に咽入つた要太郎は、最う喉を下す事が出来ぬ。腹一杯に何が爲つたか。土瓶の湯を取つて、注いで、一息に飲干して、掌で顔を撫廻したが、其時殊に目の端を強く撫でたとは、お米の眼が涙に曇つて居すとも、認る事は出来なかつたらう。

「これだけでも澤山、妾は最う我慢が仕切れなかつた處へ、今夜ですよ、御父さんが、酔ばらつた勢ひで、お前は山の上へ行くのを厭がるには、何か譯があるのだらう。此間氷室谷の山路さんの小家へ、妹と一處に泊つて来たといふのが、如何も怪しい。我はこれから山路さんの家へ掛合に行くといふので、そんな事を言ふやうな父様ではなかつたので、すが、貧乏に成つた所爲か、酒に酔つてからの所爲か、あんまり情けないではありませんか。此間泊つたのは、妹と二人で木を拾ひに来て、あまり寒いので、此所の圍爐裏に當らして貰つて居る内、大變に風が出て、雪花まで散るし、然う斯うして居る間に、日は暮れるし、外へ出れば身を削られる様に寒いのに、小家の中は好い心持に暖かだから、何んとなく歸るのが厭になつて、それで泊めて貰つたので、未だ氷の入れてない氷室の中で、どんどと炭火を熾して、布圍も着ぬのに暖かく、蕙を敷いて寐たばかりなのですもの。それを彼此言はれて御家へでも掛合ひに行

かれやうものなら、妾は如何したら好いだらうと思つて、最う心配に心配が重なり合つて、耐えられなくなつて、家を飛出して、彼の七折の淵へ身を投げたのですよ』

『身を投げてから最う死たくなかつたのか』と要太郎は問ふた。

『さうですよ、厭になつたのですよ』とお米は答へた。

『今でも最う死ぬのは厭なのだね』

『厭ですとも、妾は淵から上ると、後から死神にでも追掛けられる様な氣持がして、此方へ逃げて來たのですよ。家より此方が近い上に、家へは濡れた儘では歸られず、他に行く處もありませんし、彼のいつか寒かつた時に、圍爐裏に當らして貰つたのを思出して、衣服の于る間は氷室に居させて貰ひたくつて……又此所へ泊つたら、御父さんは尙喧ましく言つていせうが、妾も最う仕方ありません、これも家の爲だと思つて、どんな厭な厭な處へでも、妾が覺悟を極めて行きさへすれば好

いのですから、行きさへすれば御父さんだつて、喧ましくは言ひは仕ません、見すく姉さんが彼様に成つて歸つて來なすつたのを、見て知つては居ても、妾は最う死んだ氣で、辛抱します。だから、妾は七折淵で死んだも、同じ様なものなのです。死ぬるとすれば其前に、妾は今一度氷室の暖かい中で、快い心持に寐て見たいので』と言掛けて、恐ろしく顔を赤らめたのは、折節薪木の燃盛る其影か、否か。赤らめながらも、尙語り止まぬ『妾が湯宿へ行くに極りさへすれば、此處へ泊つた事が分つても構いはしません。要さん、是非一晩泊めて被下い、厭ですか黙つて居て、妾は何んと言つても今夜は泊つて行きますよ』

此時要太郎は組合せた立膝の間に、兩手で抱へた頭を押込む様にして『私は如何も困つて仕まふ、實に如何も私は困つて仕まふ』

『泊るのが、ですか。妾が泊るのが、いけないのですか』

『いや、泊めるのがいけないのではない、今夜泊めるばかりぢやない。』

出来るならお前の一生の振方をつけて上げたいので、借金も返へし、姉さんや御母さんや弟の子やの病氣や怪我を、充分に手當をさして、父様にも仕事を授けて、それからお前を湯場女なんぞに遣らなくツても濟むやうに仕て上げたいのだが、私には如何も出来ない。如何も然う種々では尙の事だ。それが一件でも私にはむづかしい。嗚呼情けない事だ、お前は如何しても山の上へ行く氣かね』

『仕方ありません、最う氣がくさくして来て、面倒だから、妾は行きます』

『氣がくさくして、面倒臭くなつたのなら、淵へ飛込んで死んだ方が、私は好いと思ふ、其方が好いと思ふよ、同じ氣のくさくして、面倒臭くなつて、思切つた事をするのなら、山の上へ行くよりか、死んだ方が』
『ですから、死かけたのですが、死ぬのが又厭ですから、矢張行くのです行きさへすれば好いのですから』
『行きさへすれば好いと思つて居

るのが間違つては居ないか知らん。私なら死ぬ方が好いね、何事もなくつても、私は死たいのだもの一人で此所に居ると時々死たくなるのだけれども……本家に居た頃から、矢張死たくなつて来た、時々、それは何んでもないのに……何んでもないのに死たい位だから、私の身上にそんなに種々の不幸福が重合ふて来ては、逆も堪らない、疾くの昔、私なら死んで居るが』

『いけません、そんなに言はれると、何んだか妾も死たくなるから。……それよりか妾さん、湯宿へ行く前に、わざく来た妾、死掛けて濡らした衣服の干く間、家の薄い布團よりか、心持快く、暖かに、一晩泊らして被下いよ。妾はそれで澤山です。それさへ出来れば湯宿へ行くつても、他に心残りはありません、姉さんの様になつて歸つては、最う貴郎に顔を合せる事が出来ませんから』と言ひながら、片手を要太郎の肩に加へて、片手に溢る、涙を押へて居る。要太郎は顔を矢張伏せた儘で

「それ程氷室が戀しいか」

此二夜を一生の快樂として、一夜につゞく此後の幾千夜幾百千夜を、有り得る限りの苦しさ悲しさ心猿しさで送らうとする少女を、此一夜の快樂に留めさせて、一生を此所に切留めて遣るのが慈悲。それを決行するには、おのれの一生を犠牲に供さねばならぬと、要太郎は考へたか。但しは唯何んの氣なしに、過まつて戸を締切つた結果なのか、あはれ二人は氷室の中で、さも樂し氣に、さも〜樂し氣に、蕙の上へ枕を並べて宵に暖めた甲斐もなく、炭灰の冷かなると共に五体氷の如くなつて、窒息して死んで居た。

(をばり)

非常線

其一

全く何も無くなつてしまつた。能くもまア賣盡した。又質に入盡した。此横濱へ來てからの衣類諸道具、悉く無くして此始末に爲つたのは未だ未だ驚くに足らぬ。我も相模の高座郡では、母指には折られずとも、中指とは下らぬ財産家で、米田東一と言はれては縣下で誰知らぬ者もない、それだけの身上であつて、三年、四年とまで経過せぬ間に、地面も山林も家も藏も、悉く賣飛して無くした男だもの、當然だ。何んのぼる衣服の二三枚、がらくた道具の一荷二荷、踏倒されて、蹴散らされて、古看屋奴、古道具屋奴、酷い事を仕やアがる。今此所に残つて居るのは、最早や巡査の古服古帽、これも免職に爲つた時に返納するのをずるけて居たので、我の物とは言はれぬのだ。此他には紙入に三圓と少しの端錢、

六萬圓から有つた米田家の財産が、遺果して今日三圓計とは、でも、これでも、これだけでも、懷中に有る内か不思議なのだ。考へて見ると能く我も浪費したよ。實に下らなく遣つて仕まつたよ。半分は自己自棄で、けれども半分は眞面目にだ。つひ、會社熱に浮かされて、殖さうと思つた財産が減じた處から、其穴を埋めやうとして、益々深海へとかど陥つて、それからそれと風下とばかり廻つて、見事に失敗を取つて仕まつた。でも、酒色に如何の斯様のといふので無かつた爲に、甚しく心もくさるなかつた。失敗を重ねたと同時に、其失敗を盛返して、本の身分に復りたいものだ、勇氣は中々凜々として居たけれども、如何もそれが、何んと言つても、金銭上の信用が無くなつて居るので、思ふ儘に運動も出來ず、残念ながら土地を引拂つて、常横濱へ來て、ぶら／＼して居る内に、某人の世話を幸ひに、思切つて巡查を拜命したが、其職が如何して

我に長く勤めて居られやうか。諭示免官と謂うやうな事で罷められて仕まつて今日に成つて見ると、如何も愈困つた身の振方。女房は子供を連れて實家へ行つて仕まつた。老母は親類へ托して仕まつた。扱此身は如何しやう、何處へ行かうか、誰の家に托されやうか。當年三十九歳、最う來年は四十だ。四十面を提げて宿無し同然、がら明きの浪宅に唯一人取残されて、自分一人の身の振方に困るとは、如何してまア此様に意久地が無いであらうか。これで昔の米田の身代に回復仕やうといふのは、實に全くの處かむつかしい。我事でありながら我を買冠る事が出來ぬ。一家四口の生活がむつかしい位で、六萬圓の身代に盛返さうといふのは、出來得べからざる事だ、望むべからざる處だ。這んなに我は最初から意久地無しであつたらうか。驚くばかり腑甲斐無しには、いつの間になつたのであらうか。這んなに勇氣が消滅して居やうとは、思ひも寄らずに過して居た。

けれども、此様に逆境の底まで突抜けて居るからとて、此儘へこたれ
て仕まふのは残念だ、如何にも口惜しいといふ事は決して消滅せぬ。回
復の一念は決して冷却せぬ。貧すれば鈍するといふけれど、我は其様な
事はない、決して無い、鈍は仕て居らぬな。我と我に問ふて見ても、大
丈夫だと答へるばかり。我は七轉して居るから、八度目に今起きるの時
だ。それだけの準備を仕て居る處なのだ。若い時の様に盲進するやうな、
呐喊的勇氣は欠けたかも知れぬが、分別は出来て居る、充分思慮を廻ら
す事は出来るのだ。だから昔の如き失敗は最う決して取らぬ。今だけの
分別が彼の時に有つたなら、斯うまでは零落せぬものを。
彼の時の、第一に躓いた時に、未だ残つて居た財産、あれだけが今有る
ならば、決して失敗は爲ぬものを、それを運用して、穴を埋めた上に、
目的通り、三倍、四倍、五六倍までも殖して居るであらうのに。
彼の時は分別が無く、今と成つては資金が無い。

彼の時の残額、否、其十分の一、否、其又十分の一、それだけ有つても、
今ならば、結構だ。それを土臺にして、確に儲けて見せる。昔の米田の
家に恢復して見せる。空想ではないか、否、空想ではない。確かに出来
るか、うむ、確かに出来得る。が、しかし、五百圓どころか、五十圓も
無い、五圓にも足らぬ三圓餘と巡査の古服古帽とが有るばかりで、それ
で何が出来るものか。誰が取合ふて呉れるものか。三圓、古服、古帽、
これだけを抱へて、今や立退かねばならぬ借家の一間烟草を喫はふにも
燧火すら無い。おはれ此米田家の末路、これが東一の現在の有様か。

其二

此所で非常な事を實行して見たくなる。それは中々以て大事件だ、思切
つた事だ。これを實行するとなると、我は大變だ、米田東一は社會の大
罪人に成るのだ。大悪人に成るのだ。斯ういふと最う分るだらう。非常

な事とは盗賊に爲るのだ。

人は救ふて呉れぬ、誰も扶けて呉れぬ、誰一人見向きも仕て呉れぬ。それが爲には一家分散の悲境に陥つて、如何する事も出来ぬ此米田東一に誰が、五百圓の五十圓の、五圓の金子すらも貸して呉れやうぞ。何者の好事家が我に資本金を與へて呉れやうぞ。

泥棒でも仕なければ、何處から其資本金が出やうぞ。如何して恢復の軍用金が造られやうぞ。泥棒、泥棒、泥棒の事だ。

待て、しばし、人の金子を盗んでまでも、自家の隆盛になるのを勉めねばならぬか。悪事を仕てまでも失敗を取返さねばならぬか。充分これを研究仕なければならぬのだ。

正直に是を研究すれば、それは最う分り切つた事、知れ切つた事、研究などと、そんな事を以て頭を苦しめるまでの事は無いのであるが、私の境遇、過去の、現在の、其私の境遇からと、人間が、の結局の一

か六かの押詰の勝負を決する時の取るべき手段、これは順道を以て進ま

れぬのである、奇策を此所に取らねばならぬのである。

我は此頃悟つた事がある、人間は正直の心ばかりでは行かぬ、不正直の心も少しは無いと、如何も行かぬ。善人ばかりでは押通されぬ世の中だ、

少しは悪黨でなければならぬ。

泥棒、眞の泥棒と言へば、我が権利株や、手形の融通で失敗した、其失敗に反して巧く立廻つた側の奴等だ。實に彼等は泥棒なのである。投機を勧めたり、商法に手を出したりして、我を這んなに零落させた奴等は、實に泥棒の親玉だ。それ等が榮えて居て、我が此有様とは何事だ。ぢやに由て、我も亦、其泥棒の仲間に入る、といふ譯でもない、我はそれ等を罰する職に居らぬのである。故にそれは如何でも好いとして、我が其泥棒に爲つたとして、何の事があらうぞ。構はぬ、少しも構はぬ。知れるものか、人に。知らせるものか、人に。警察の内部を知つて居る我

だ、非常手段として、唯一度の泥棒を爲るのに、何の構ふ事があるものか、何んで人に知らせるものか。

秘密は誰にでもある。人間一生を通じて悉く善行の者は先づ少ない。一度や二度の悪事は、秘密として存して置くのだ。

強盗、窃盗、それは未だ極めぬが、兎に角資本金を作る爲に、盗を働くといふ事だけは極めた。うむ、斷乎として決定した。

自分が盗賊に成ると定まると、その大敵の巡查の古服、見るのも厭だ。

これを賣る事も出来ず、捨てる事も出来ず、残して行く事も出来ず、如何なる事も出来ず、これを見詰めて言ふに言はれぬ不快感を生じて、腕組を仕て居る内に、曾て自分が此服を着けて、此帽を冠つて、そして洋刀を携げて、巡查の資格を以て、某賊を捕へに行つた事を思出した。

其賊は、實に巡查の服装をして、圖太くも白晝某街の四辻で、田舎漢を引留め、調べる事があるといふて、其鞆を受取り、警察へ同道するつも

りで、途中でまで行つて、姿を隠して仕まつたのである。鞆の中には三十餘圓入つて居るのである。それを彼は奪つたが、高飛もせず、眞金町で、全盛遊びを仕て居た爲に、直ぐと刑事巡查が嗅付けた。我々共に捕縛に向ふたのである。

此古服、此古帽、思着いた、我は好い事を考出した。いまはしい帽も服も、今は中々に頼母しくなつて来た。斯くせよとて、天が我に此品を與

へたのだ。斯くならうと思つて、我が取残して置いたのでは決してない。我はこれで洋刀を買つて、それから手帳を買つて来ねばならぬ。それで此古服を着けて、此古帽を冠つて、又本の巡查になるのだ。これでは盗

賊になるのではないと人は言ふか。我は急に服を擴げて、切れては居らぬか、破れては居らぬか、綻がありは爲ぬかと調べて見た。

幸ひにして古いだけで、異状はなかつた。

我は急に又此服を着て見た。上着もずばんも悉く肌に着けた。そして又帽を冠つて、隠袋へ手を入れて、反身になりながら、部屋の中を歩いて見たが、何となく着心が悪くつて、何處かに針が植えてある様に思はれて、其肌觸の薄氣味の悪さ。既に此時に大いなる罪といふ物を冠せられた様な氣がして、巡査の服、直ちに是、罪囚の獄衣ではないかと疑はしめた。

其 三

我は知つて居る、大膽でなければ盜賊の成効はむつかしいといふ事をだ。處が我は元來大膽な人間ではないのだ。けれども大膽に遣通さねば、此仕事は直ちに失敗するのだ。思切つて大膽に、何處までも大膽に、意外に大膽に出なければならぬのだ。我は知つて居る、悪事の仕事場、盜賊の集會所、それは停車場である

事を。

停車場は種々の人物が集まる處だ、加之慌て、集まる所だ。急がしく入つて急がしく出て、心が急々と始終混雜して居る場である。荷物を持つて居る者や、金子を澤山持つて居る者や、見送られる者、見送る者、共に別離に心を傾けて居てつひ懷中が留守になる、或者は時間が迫るので、乗遅れは爲ぬかと急つて居る、或者は札を買ふのでまご／＼して居る。千差萬別の其中に、田舎漢が見物に來た歸途の茫乎として居るのを最も巧みに窃取する賊が集まる處だ。否、茫乎として居る田舎漢ばかりではない、頗る機敏に立廻はつて京濱間を日に何度となく往來して居る商人などの靴、もしくは懷中をも最も巧みに仕て遣る巷賊が集まる處だ故に従つて警察の方でも、此所へは老練にして且つ機敏なる手腕を有して居る巡査を絶えず見張らして置くのである。我は此所へ突進仕やう、突進して如何して我は本物の巡査の眼を眩ます

るか、眩まして、そして、如何なる仕事を働くのか、あまりに大膽なる我が突進、果して成効するや否やと真に成効するや否やと疑念を生ずるやうでは、未だく大膽で無いのである。

私の免職に爲つた事は横濱中の巡査が知て居る筈だ。況して機敏なる停車場の巡査だもの、必らず知つて居るに違いないのだ。それが又私の官服を着けて、悠然として停車場に入込んだから、何と思はふ。加之其偽巡査が、某に對して某の所業を行ひ、某をして何々せしめてあらむには、忽ち我は露顯に及んで、即座に捕縛されるのである。

其危さを考へた時には、何も出来ぬのである。大膽でなければ何も出来ぬといふのは此所だ。要心の裏には油断があるのだ。其眼の鷹の如き巡査の鼻先を利用するのが、此方の智恵だ。如何に我が大膽に立働さ得るかを我と私の試験するに適して居る時は來つたのだ。既に停車場は我前に來つたのだ。我は既に洋刀に手帳、三圓の中から資本を下して古道具

屋と紙屋とで求めて、古服古帽又古靴、これ立派な巡査何某に化して、市中を緩歩して、既に停車場の前まで來つたのだ。

一番危い停車場も、一方から見れば一番仕事の爲すに易々たる場所として我は來つたのだ。我が大膽に構へて成効する場所として選んだのは、百か、千か、一時に取つて、悪事を唯の一度に決し得られやうと思ふからだ、迂濶なる田舎漢が多からうと考へたからだ。

停車場に入るのも迅速なら、仕事を爲るのも迅速、又出るのも迅速でなければならぬ。恰も電光の如くに、流星の如くに。

錦橋から最も急歩で、噴水器のある小池の前まで行かねばならぬ。それから停車場の入口、其處を窺ふて、巡査の影が見えぬ時には、又々大急足で其處まで行つて右の入口、左の入口、兩方から一寸中を窺ふて、左の方に居たら右の方から、右の方に居たら左の方から廻はつて、急に、頗る急に、待合室へ飛込まふ。もし又見咎められたら其時だ。更に他縣

とか、或は東京でも好い、更に巡查を拜命した、用務があつて横濱まで来たといふても濟む事だ、

我は今、第一級の錦橋から、噴水器の邊まで急歩した。扱て此所から停車場の入口の方を窺ふた、幸ひにして巡查は居らぬ。

大急歩を以て、其入口まで行くべきであるが、此所までは大膽であつた我の、俄に臆病に爲つて如何しても進まれぬ。

引返さうと思つて、されば何の考慮もなく引返さうと思つて、二歩三歩後退つた時に、櫻橋の方から五六輛の腕車が走つて来た。これは停車場の方へ向ふのである、と同時に停車場の中では、今東京から汽車が着いたらしく、間もなく東京行と國府津行と兩方に殆ど同時位に出るらしく。

號鈴はがらんくくと高らかに鳴響く。早や構外へ乗客は出て来る。車夫はこれに群がり着く。中々の混雑を極め出した。

今だ、今だ、今だ、それは誰に誰が喉を掛けて居るのだ、我はそれを知

らぬながら、今だ、今だ、今だ、今だと思つて、氣がはらくとして居る。不圖氣が着いて見ると、今だ、其今だは、我身上であるのだ。

此様に、びく／＼仕て居ては駄目だ。大膽ならざる可らず、大膽ならざる可らずだ。

前を過ぎたる腕車の影に伴ふて、我は思切つて入口まで急歩した。

其 四

此所まで来て躊躇する事の不利位は知つて居る。右の方の入口から内部を見ると、幸ひにして巡查は居らぬ、思ふに改札所の方へ行つて居るのであらう。

乗客は皆、其方に集まつて居る。東京行の汽車又は國府津行のに乗らうとして。

我は突として待合室へ入つた。其處には最う誰も居らぬ。唯一人の紳士、

それがこれも乗車すべく出掛けて居る處だ。目的の田舎漢ばかりではない、一人一人も居らぬ様に成らうとする、其出掛つて居る紳士の顔を見ると、向ふでは知るまいが、此方では見おぼえのある某銀行の役員だ。それは曾て其銀行の乞に應じて、金庫の前に立て居た事のある、其時に見おぼえた顔である。今は選り間が無い、銃獵者が雁を得んとして家鴨を撃つた例と同様だ。大膽の結果として、我は其紳士の前に立ちふさがつた「貴郎は〇〇銀行の方ですぬえ」と我は言つた。「さうです」と紳士は何心なげに答へた。「姓名は何と言ひます」「私のですか。私は宇田岸讓と言ひますが、何か御用ですか」「あッ、宇田岸さんなら愈貴郎だ。調べる事がありますから、一寸警察まで同行なさい」「警察へ同行……私は同行される事はありません」と言つて、我顔を不思議さうに睨付けた時には、實に如何も我眼が恐ろしく奥深く陥つて、瞳孔が据つて動かすに、我が此眼は盜賊の眼であると名乗るらしく

思はれて、それを彼に悟られた様に思はれて、知らず顔を反けたくなつたけれど、それを耐へて「いや調べる事があるからです、署長からの命令ですから……」

「でも私は急用で、御覽の通り切符まで買つて。あッ、最う汽車は出るやうです」「いけません、汽車は出ても仕方がないです。御同行なさい」「それア御同行も仕ませうが、何の件で私は引致せられるのです」「いや、それは署へ行けば分るです」斯う言つて、少しも早く構外へ引出さねばならぬのだ。眞の調査は來は爲ぬか、刑事調査でも來は爲ぬかと、此時の心配さ加減は、一通りでない。紳士の心配も亦一通りならず見える。「さア早く御出なさい。署へ來れば分る事です」と少しく強く出た。それは強くいふつもりでもなかつたが、何分にも氣が急くので、思はず知らず甲走つたのだ。

宇田岸は是非なくといふ調子で「それでは参りませうが……如何も何

事で警察へ……」など、首を傾けて居る。それでも未だ足は踏出さぬ。我は引張るやうにして「さア行きませう」はア、参りますよ」我は素より氣が急くので、ずん／＼足を早めて構内を出る宇田岸も警察へ同行される事が不服だから立腹して居るので。これも早や、嗚呼、存外安らかに虎口を脱した。最上此上は此方の物だと、一時に安心の息を吐くと均しく氣が落着いて、今まで殆ど一皮包まれて居た様なのが剝けた様に感じて、頭腦が一層鋭敏に爲つて來た。銀行員の宇田岸といふ男子、中々以て一筋縄では行かぬ奴らしく見えて來る。又其通常の田舎漢などの比でない、世情に明るい、所謂抜目の無い人といふ事も分つて來る。これを如何して欺き得るか、我に此人が欺き得られるであらうかと、心配で心配でならなくなる、又其斯うして二人で行く途中に巡回の巡查に出會したら、如何しやうと考へて來る。又其此宇田岸といふ男が、我を既に偽巡查と知つて居て、それで欺かれた風を粧ふて、警察まで同行して

不意に巡查に引渡すのではあるまいか、とも考へて來る。斯う胸に浮んで來ると、急に大膽の附景氣が薄らいで、此所から逃出したくなるけれど、逃出してはそれこそ却つて危険だ、などと、急所を知つて居るだけに、其手も出さない。腦が種々に混雜して來る内に、最上大江橋を渡つて仕まつた。これまで不平で弗々と怒つて居た宇田岸は、急に温和の言葉を發して「如何でせう、何の嫌疑で私は呼出されるでせう」と心配を包んだらしい聲で言つた。「いや、實は、銀行の贖札の、何んで、貴郎が今贖札を持つて居るならうとの見込で、いやさ、貴郎は知らぬ事だ、銀行の方で……」と、わやふやに言つた。宇田岸は此時急に顔色を變じて「贖札、それア私が今東京へ持つて行く内に有るのですか」と問ふた我は此人が何を東京へ持つて行くのか、知りはせぬけれども「左うです」と立派に答へた。

「此内に贖札が……へえそんな……譯はないのですが」と愈々心配でならぬらしく、鞆を右の手から左へ持替へた。我は此時、初めて此人が鞆を持つて居る事に気が着いたのだ。實に我の眼は恐ろしく狂つて居るのだ。これが眞の巡查の職に居た頃には、目を着けた人の身の周囲は、ちろりと一睨みで、最う見取つて仕まふたものを。

此鞆、これが焼點だ。これに曰くがあるのだな、好し、最う此方の物だど度胸は定まつた。

「貴郎が東京へ持つて行く鞆の中に見込があるのです。なに、それを一應調べて見れば好いのですから、直ぐと用は濟ませう『へえ、如何も決してそんな譯はないのですが』を吐きながら、又左から右へ持替へた間もなく都橋まで來た。橋を渡れば警察署だ。停車場よりも、更に大膽ならざる可からざるの時は來つた。

其 五

橋を渡ると直ぐ左側は警察署だ。悠然と粧ふて我は先づ門を入り。直ぐ人民控所へ入つた。宇田岸も従ふて入つた。

此所だ。勝負は此所にあるのだ。更に大膽に構へねばならぬ處だ。大いに悠長に見せねばならぬ處だ。

「此所へ待つておいでなさい。今に呼出しますから。それから。其鞆を御出しなさい」

「これですか」と眼を丸くして宇田岸は言つた。

「それです、御出しなさい」と我は嚴格に言つた。

「これは銀行ので、如何も大事なのですから」と宇田岸は死を以て守るといふ風で拒んだ。

「銀行のだから調べるのです。御出しなさい、貴郎は拒みますか」

「拒む譯ではありませんが、これは如何も……私か御調べを受ける時に出しても好う御座いませう。それまでは私が持つて居ませう」

「あゝ、貴は私の言ふ通りに爲ぬな。私は署長の命令で持つて行くのです。それを拒むなら、私は私の職權を以て持つて行くです」と威張つて見た。

「いえ拒む譯では決してありませんが何をいふても大切な鞆ですから」

「大切な鞆なら慥に私が預つたといふ證を上げませう、安心の爲に」と面倒臭いが、といふ風で言つた。

「それでは左様願ひませう。甚だ御手数ですが」と言つたので、我はやれ〜と安心して、無言で悠々と、されば、自分では餘程悠々と構へたつもりで、隱袋から手帳を取出し、それに鉛筆で。鞆一個の預證を書いて、名前は、巡查濱田神藏、と出鱈目に書いて、其頁を引裂いて、そして渡した。

これから我は何か言つたのであらう。宇田岸も如何か仕たのであらう、言つたのであらうが、我は實に眼にも耳にも入れなかつた。鞆を受取るや否や控所を出て、怪し氣に此方を見て居た受附の巡查、それが幸ひに新參の人で、我を知らぬのが何よりの幸運、用有り氣に見せて、裏口の方へ廻はる様な風を見せて、突と裏門へ抜けて、突然我は伊勢崎町の方へ走出した。けれどもも巡查の服装の者が、駈て歩いては人に不審を打たれるので、勉めて緩歩仕やうとは思つたけれど、後から大勢で追ふて來る様に思はれて、如何しても走らずには居られなかつた。

一度、今日を限りの明家、末吉町の前の住家に歸つて、急いで官服を脱いで、帽子と洋刀とをこれにくるめて、縁の下を堀つて、埋めて置いて、いよ〜差配に引渡をすべき段でありながら、それも爲すに、最う通常の人民に爲つて、鞆を提げて飛出して、直ぐ高飛を仕やうと思つたが、

未だ日が暮れて居らぬので、のみならず、汽車の時間が未だ早いので、のみならず、二度停車場へ行くのが何となく恐ろしいやうで、それに高飛の善悪も考へねばならぬので、一層燈臺下暗しで、横濱に潜伏して居やうかと考へたれど、それに又愈高飛をするとして、何方へ向ふて行かうか、それも研究せねばならぬので、兎にも角にもといふので、山吹町の、それは豫て知つて居る鐵葉屋の二階、其處の主人に、借金取に追はれて居るのだから、一寸隠して呉れとか何んとか頼んで其處の二階、汚いが、狭いが、暗いが、彼處を借りて、其處で靴の中も見やう、後の事も考へたらと其處まで歩いて行つて、主人に會つて、事情を話して、そして二階へ上つたまでは、實に夢の様で、熱に浮かされた様で、丸で何んだか順序が狂つて居る様で、細々と迎も語る事が出来ぬ。

誰も二階へ上つて来て呉れては困る。私は少し考へる事があるのだから、と言つてゐるから、大丈夫だらう。下から階子を取つて仕まつたから、

大丈夫だらう。何處からも此二階は覗く者もなからう。最う大丈夫だらう。さア先づ靴の中を第一に見なければならぬ、五圓か、五十圓か、五百圓か、百圓以上なら締めた者だが、五百圓なら以上は又無いのであるが、もし又千圓も有らうものなら、實に申分は無いのであるが、幾金か知らん、と胸をきくで、靴の口へ手を掛けた時に、下で恐ろしい大きな音響が仕た。吃驚して、靴を袖の下に隠しかけたが、それは、實に、鐵葉の石油函を投出したのであつた。

其 六

再び靴の口へ手を掛けて、バチンと推した時に、兩方へ開いた其一瞬時、何んでも大變だ。何んにしても大變だ。これはえらい事を仕た。宇田岸が手安く渡さなかつたのは無理はない、百圓紙幣の束が三個四個見えたからだ。

既に盗をするといふ以上は、少しでも餘計に取らうといふのが希望で、少しでも餘計に取れたなら、又嬉しからねばならぬのであるが、我は實に嬉しくない。恐ろしくなつた。此んなに澤山紙幣が入れてあらうとは思はなんだのである。百圓紙幣が一束。十枚を一束として千圓。それが四個で四千圓。これは大變だ、四千圓からの賊となると、警察の方でも大騒ぎだ。非常にそれは非常に嚴重に搜索されるのは、最う自分は好く知つて居るのである。これは大變だ。如何も大變な事に爲つて來た。

今頃は大變だらう。電話。電信。派出所。刑事係の奔走。巡査の非常線。署長の命令。部長の繁忙。署内は大騒ぎであらう。

偽巡査それは直ぐ我だと鑑定を着けるであらうか。それとも知れまいか。我が大金の賊とは意外に思ふであらう。

大金と言へば、何程あるのであらう。未だ我は實にそれを知らぬのである。未だ鞆の中を丸で見ぬのである。願はくば、最う、四五千圓で留つ

て呉れる。此上は全く如何する事も出来ぬ。四五千圓で留つて呉れる。如何かそれだけで他は反古紙であつて呉れる。斯く念じながら我は再び鞆の中を見る、思切つて紙幣の束を引出して見ると、これも皆百圓紙幣で、有る。有る。如何も有るは。これは實に千圓宛の束が六十ある。即ち六萬圓!!!

茲に至つて我は氣絶するばかりに驚いて、驚いて、驚いたのを抜通して其頂上を通過して仕まふと、今度は全く肝が太くなつて、眞寔の大膽なる男と成り了した。

彼宇田岸が、銀行から東京の支店、或は關係の銀行かへ、六萬圓持つて行く處であつたのだ、正統の順序を踏まずに、そして大金を大金らしく見せかけずに、わざと何んでもなく粧ふて、それで持つて行かうと仕て居たのだ。話には聴く事だ、能く此様な事は有内の事ださうだ。

宇田岸も其大金ではあるが、停車場で自分の〇〇銀行社員たる事を知つ

て呼留めた巡查、それが警察まで同行して、其處で鞆を受取ると言つたのだから、迂濶と出したのも無理はない。

が、扱て、六万圓。六万圓からの大賊。これは最う一通りの騒ぎでない事は分つて居る。最う斯うなれば我も自棄だ。我も覺悟をした。毒を食ふなら皿までだ。一通りでは逃げられぬと覺悟した。逆も一通りの遣方では姿を隠して高飛をする事は出来ぬ。非常手段を以て圍を切抜けねばならぬ。決心した。我は最早や近來に無い大盜賊に爲つて居るのだから。

其大盜賊は、今、袋の中の鼠も同然である。恐るべき非常線は横濱中、網の目の様に張つて有るのだ。自分も曾て張つた事の有る、嗚呼、彼の非常線!!!

これから富岡から金澤の方へ逃げやうとするのは、町々角々の非常線を潜つて出ると、必らず彼の石炭庫の處へ出ねばならぬ。

其石炭庫、其處だ。彼處には必らず張つてあるに違ひない必ず彼處には張つてあるに相違ないのだ。

それなら、東海道の裏道の方へ出やうとするには、嗚呼、彼の御三の宮、彼處の木の蔭から、ずか／＼と出て來るのが目に見えて居る。これも駄目。

程ヶ谷の方へ出やうとしても、彼の野毛坂で喰留められて居るし。神奈川まで歩いて行くとするど、櫻木町邊で捕へられる。これも駄目。

停車場、或は着船場。その危い事は誰でも知つて居る。嗚呼、生中非常線の急所々々を知つて居る其爲に、無鐵砲に圍を突切るといふ勇氣が出て來らぬ。

それなら。いつまでも此所に潜んで居やうか。鐵葉屋の二階に潜伏して居やうか。其危険なのは非常線を突切るより未だ上だ。

實に我は重圍の内にある。網裡の魚だ、袋の中の鼠だ。何故ま／＼し

て居る内に我は東京へ走らなかつたらうか、否、何處かへ走らなかつたらうか。それは這んなに大金とは思はなかつたからだ。何故我は早く鞆を開いて見なかつたらうか。

今更そんな事を考へても仕方がない。一步を過まつて重圍の内に入つた上は、此上の一步を過まつて捕へられぬ考案を廻らさねばならぬ場合だ。咄、我は今までの米田ではない。六萬圓を持つて居る大金持だ。大金持の了簡で方法を案じ出さねばならぬ、と同時に大盜賊といふ事を忘れてはならぬ。

折から、二階の下から主人の聲で『米田さん、暗いのに何を仕て居るのです。今燈火を上げますが、まア一寸降りて來たら如何です』成程暗くなつて居る、いつの間にやら日は暮れて居るのだ。

其七

間もなくカンテラを點して、それを持つて、階子を掛けて、二階へ上つて來さうだ、主人が。

周章て紙幣を靴の中へ詰込んで、それを枕にして寐た振を仕て居ると、がた／＼二階を震動させながら昇つて來た主人。彼は炭で顔が燻つて居る。仕事着の筒袖の儘で居るので、片手にカンテラを持つて居る圖は、丸で金山の穴堀の様だ。

『米田さん、寐て居るのだね』と言つた。彼の言葉に初めて目の覺めた様な顔をして『おう日が暮れたのか、ちつとも知らなかつた』『お前さんも吞氣だね、借金取に追掛けられて居るのに、二階で寐て居るなんて』吞氣どころでは無いのだ。大變なのだ。

『能く寐た、ちつとも知らなかつた。時に如何だらう、君に頼みがあるのだが』『何んですね』『君、事に由たら今夜、泊めて貰ふかも知れぬが』と言出すと、向ふでは怪限な顔をして、

「初めから泊まるつもりで、お前さんは来たのでせう。家でも其つもりで、今何んにもないが、米飯の支度をして居るので」「いやそれは濟まない、それでは濟まないが、ぢや濟ないついでに」と言ひながら、彼の三圓の内から洋刀と手帳とを買つて、未だ残つて居る一圓紙幣を出して「濟まない序に酒を一升買つて来て被下い」「よろしい承知仕ました。だが、これでは多過ぎますせ」と紙幣を捻くりながら言つた。

「いや、餘つたら今夜の宿賃だ」と言つた「それア如何も此方から濟まない。だが折角だが貰つておきます」『其かはり構つてはいかんよ』構やア仕ないが、米田さん、大變に金持に成つたぢやアありませんか。これなら借金取を逃なくつても好いでせうよ』『なに、口が大きいから』とは直ぐ何氣なく答へたけれど、實に此主人の言葉には、とさん、と一打胸の早鐘。

「まア何んだ、後でゆっくり話に來ませう」と主人は紙幣を持つて降り

かけた。

「ねえ、大丈夫だらうねえ、僕が此所に居る事を、誰も知りはずまいねえ」と我は心ならずして問ふた。

「大丈夫さ、誰に知らせるものか。安心しておいでなせえ」と言つた。

「此上よろしく頼むせ」「大丈夫です」

此請合つて呉れた主人の言葉の頼母しさ。降切つて階子を取去つたまで、其方に向つて實は拜まぬばかり。彼は我を大盜賊と思つて隠して居るのではない。借金取の追撃を避けて居るのだと思つて、それで誰にも知らせぬといふた。大丈夫だと請合つて呉れた。それとは知つて居ながら、何となく、我の意中を悟つて、心を汲んで隠隠して呉れる様に思はれてならぬ。

今、酒を買つて呉れるとて一圓出した。我は酒が飲みたいのではない、主人に金子が遣りたい爲なのだ。遣つて其金子の光で、我を隠して貰ひ

たいのだ。一圓、それは僅少だ、もつと遣りたかつた。五圓、十圓、いや百圓札を、いや千圓、二三千圓、遣つても好いのだ。けれども、遣れば疑はれる。實を明かさねばならぬ。彼が運と承知すれば好いが、彼とても、六萬圓といふ聲を聴いては、直ちに畏縮して仕まふのは眼に見えて居る。密告するか、それでなくば、即座に此所を出て行つて呉れるだ。若し彼が、金錢で自由に我爲に働いて呉れるなら、千圓は愚か、二千圓でも、三千圓でも、一萬圓でも、三萬圓でも、六萬圓皆でも遣る。六萬圓悉く遣つてしまつて、それで我の犯罪が消滅すれば、此上の事は無いのだが、嗚呼。

其 八

其内、夕飯が出来たのだ、膳の上に酒を添へて持つて来て呉れた。そして主人が話に来て呉れた、が、食はなかつた。そして酒も飲まなかつ

た。主人とも碌に話も仕なかつた。

「先には呑氣の様であつたが、今度は餘程心配と見えて、酷く鬱いで居るぢやアありませんか」と言つた。

「先の呑氣は呑氣ぢやアない。ふて寐を仕て居たのだ。今の心配が本統なのだ」

「それでは又ふて寐でもするが、いゝのさ。夜中に眼が覺めたら一杯お遣んなさい。酒と膳は矢張此儘にして置いときますから」

「それでは然ら仕やう」「私は又夜業だ。鐵葉の音が喧しいでせうが、我慢して被下い。布団は其戸棚にあるから、出してね、好うですか、ぢやア御寐みなさい」と言つて、主人は降りて行つてしまつた。階子は例の如く下から引かれた。

寐るべし、寢るべし、寢て考へる事だ。先布団は出て敷ておく事だ。馬鹿に寒い。おやく、火鉢が有つたのだ。炭取も有つたのだ。炭を次が

ないものだから、消えて居るわ。邪魔だ。
 我は着た儘で、靴を枕にして、そして寝た。寐て考へると少しは好い智
 恵が出るかと思つた、が、扱て思ふた様には行かぬ。
 最先は何と考へたか、金銭で人が我の自由に働いて呉れぬであらうか。
 それだ。

此所の主人は其器でない。六萬圓で腰を抜かす奴だ。主人は駄目。鐵葉
 屋は鐵葉屋だ。

金銭で如何にもなる者は支那人位の者だ。

おう、其支那人。彼の支那人。我は支那街へ逃込んで賊を捕縛する事の
 困難なのを知つて居る。支那人の中でも無頼漢の彼の阮甫を知つて居る。
 彼のわんたん店の彼か又一通りの悪漢ではない事を知つて居る。阮甫、
 阮甫、彼奴は我を知つて居る。我も彼奴を知つて居る。阮甫の事を思出
 すと同時に、最う一方の血路が開けたやうな心持が仕て來て、嬉しくつ

て、嬉しくつて、溜らなくなつて、嗚呼阮甫は好漢だ。我を此九死の中
 から救出して呉れるのは、彼ばかりだ。彼こそ我を隠して呉れる者だ。
 然して我を安全なる地に逃がして呉れる、それに相違ない。氣を大にす
 るに足る。これこそ眞に大丈夫!!!

我は直ぐにこれから支那街へ行つて、わんたん店に行く。阮甫に會ふ。
 突如百圓紙幣を握らせて、内所話ある、奥の部屋、案内する事ある、と
 いふと、彼奴二ツ返事で、よろしい〜と言すに違はぬ。それから誰も
 來ぬ密室、所謂阿片室で、我は實情を打明けて、身の振方を頼む。其時
 又百圓紙幣を出して遣る。彼奴又よろしい〜と承知するに違はぬ。加
 之大喜びで言かすに違はぬ。それから又、我の頭髪を剃つて、ちやんち
 やん坊主に爲つて、支那服を着けて、我は忽ち支那人に化ける。其處で
 最後の談判として阮甫に一萬圓遣るから上海まで同行して呉れると頼
 む。彼奴の事だから又よろしい〜と言かして引受けるに相違ない。そ

れは巧みに這般の事を運んで、決して彼奴に抜目はあるまい、巧く胡麻化して我を上海まで連れて行つて呉れるに相違ない。

上海まで行けば最う此方の物だ。

締めた。何んど好い考案ではないか。實に我はえらい事を考出した。

これから直ぐ居留地へ行かう。だが、待て、居留地へ行くにも、矢張非常線が張つてあるといふ事は思はねばならぬ。

が、又大迂回をすれば行かれない事もないといふ事も知つて居る。蛇の道は矢張蛇だ。これから直ぐ居留地へ行かう。だが、待て、我が上海へ行つた處で、弱身に突込む阮甫が、約束の一萬圓の他に、五萬圓呉れると言出したら如何仕やう。

斯うなつて見れば、六萬圓悉く阮甫の懐中に入つて仕まつて、我は何の爲に苦勞をしたのだから、何の爲に盗を働いたのか、譯が分らなくなつて仕まふ。

六萬圓は、此様に爲つた上は、最う一文も入らぬ、六萬圓は惜しくないが、罪は如何しても我の頭上に冠らねばならぬのを思ふと、わんまり馬鹿々々しいので、如何もわんまり詰らなさ過ぎるので、これも亦一考慮しなければならぬ。

其 九

姿を變じて踪跡をくらます段に爲つて見ると、何も支那人にならなくつても好いので。これから直ぐに散髪店に行つて、髪を五分刈にして、髻を落して、それから揉上げを剃込んで貰らつて、額を廣くして貰らつて、歸つてから毛抜で眉毛を少しく抜いて、形を變へ、顔に硝酸で痣をこしらえて、口の内へ綿を含んで、頬をふくらして、それから、衣服を股引腹掛の職人風にして、それで停車場へ行けば大丈夫だ。

これ。これ。これならば大丈夫だ。何故我は斯と初めから考へなかつた

らうか。

が、待て、それにした處で。紙幣は何處に持つて居やう。六萬圓。これを靴へは逆も入れて置かれぬ。此靴は證據品だ。何處かへ捨てなければならぬ。又其職人体の物が靴を持つて居るのも可笑な譯だ。

我は又々心配でならなくなつて。寢床から起上つて、靴から紙幣を出して見て、高く積んで見て、又それを平ひらに並べて見て、それから布呂敷に包んで見て、如何も巧く行かぬ。腹へ巻いて見たが、嵩が多いので巻切れぬ。背中に入れても、如何も背虫の様に爲るし、懐中へ分けて入れても如何も不可し。

矢張布呂敷へ包むのが、一番好いが。これが又中々險呑なので。巡查がもしや我を咎める。手前は何處へ行く。へえ、小田原へ。して姓名は。へえ、何の何某。それから職業は。鐵葉職で。所持の風呂敷は何んだ。これは何んでもありません。何んでもなくても見せると來る。出す。六

萬圓が出る。直ぐと露顯だ。

これは不可。矢張不可。それに又職人に化けて仕まつては。百圓紙幣の兩替に第一困る。嗚呼、如何したら好いだらう。我は最う溜らなくなつた。悶死に死んでしまふかも知れない。死んだ方が最う好いか知れない。耐らぬ。最う耐らぬと突然枕下の徳利の酒を喇吟呑に飲干して仕まつた。

如何して酒に酔はふぞ。益々精神が錯亂して来るばかりだ。

非常線を張りに出た時には、何んもなく緩んだ處が有る様に思はれたが、斯う張れて見ると身動きも出来ぬ。これを潜つて逃けた奴は、道がに我よりは盜賊が上手だ。

如何なるものか。此處まで乗出したのだもの、遣る處まで遣通すのだ、石炭庫の非常線には幾人居るものか、高々二人だ。三人とは居るまい。構ふものか。斬殺して通つて遣る。二人や三人。一生懸命に成れば遣れ

るさ、殺せるさ。

殺して通る。待て、すると、愈々我が此方から逃げたと分つて、又先さへ網を張られる。矢張駄目だ。

それより前に考へた通り、阮甫の處へ行くと仕やうか。それより職人で、一か六か、出て見るか。

殺して通らうか。

此二階に潜伏して居やうか。

嗚呼、我には最う何も分らなくなつて来た。

何の爲に這んな罪を犯したのか。今と成つて見ると、實に馬鹿らしくな

つて来た。

宇田岸は今頃如何して居るであらうか。自分の手ぬかりで、六萬圓取ら

れたのだから、大心配をして居るだらう。矢張我の様に夜の目も寐ずに

大苦悶をして居るだらう、取られた者も取つた者も、大苦悶、大苦痛。

それは同じく苦痛は苦痛だが、其差は大相違だ。

彼には親もあろう。妻もあろう。子もあろう。我にも亦有る。それを思ふと氣の毒になつて來た。好しや彼の紙幣にあらずとも、彼の一家の心配といふものは一通りではあるまい。我はこれから宇田岸の家へ出掛けて行つて、そして實情を明かして、幾重にも謝罪して、そして願下に仕て貰ふか。

いや、願下には迎もならぬ。駄目々々。願下にならぬ位なら行くに及ばぬ。捕縛された日には宇田岸の家族が心配して居る以上の心配を、我の母、私の妻子、それ等の人に掛けねばならぬ。

何處までも押通して、何處までも逃延びて、隠れおほせねばならぬ。隠れおほせた處で、嗚呼、我は拙かつた。初一念を通す事は迎も出來ぬ。何故ならば、日陰の身の、本の米田東一では居られぬ故に。

が、これまでは皆我が想像である。推察である。非常線は張つてあつて

も、偽巡査は果して我であるといふ事が、警察へは知れて居ないかも分らぬ、存外に。

いや、宇田岸が我の人相を演述したらう、預證の字体でたしかめられたらう。

嗚呼恐るべき非常線、如何しても此外には出られぬのか。人間の法則を外れた事は爲し得られぬのか。

悟るといふのも遅蒔だが、人の常識を外れた考慮は、逆も成立たぬものか。

實に残念だが、此上口惜しい事は無いけれど、我は如何しても自訴しなければ成らぬのか。

（をばり）

後にしるす。横濱の巡査は洋刀を携へずして、官棒のみを帶ぶる由。茲に改む。

賣國奴の兒

其一

「奥様々々、今度入らッしやッた書生さんは、何んですか可笑な方で御座いますね。胴から上が馬鹿に大きクツて、腰から下はずんずら短かくツて……ですから、坐つて居らッしやると立派に見えますけれど、御立ちになると如何も不格好で、其風といふのは有りませぬねえ。それで彼の、丸で箕を裏から見やうな、平ツたい御顔ですのに、其割に眼が厭に細クツて、お鼻に鼻が御粗末で居らッしやるものですから、尙可笑いのですねえ。でも口は人並より大きな方で、齒が亂杭で、それで以て、舌が少し足りなくツて居らッしやるのか……」

「まア、お時、そんなに人様の事を悪くいふものでは有りませぬよ。顔の讒訴は別して聴き苦しいものだから」

語り掛けたのは、十六七の箸が轉がツても笑はずには濟まされぬ年頃。
 小間遣ひと見えて、髪から顔から姿まで見苦しからず。絹二子の袷に廣
 ひ唐更紗と紫縹子の腹合の帯を締めて、前掛も無し、襷も無し、茶の
 間で碁石の垢落し。黒石を一個づ、布巾で拭取りながら前の言葉だ。
 これも白石を受持つて拭いて居る細君は、三十七八歳。顔にこれと言つ
 て欠點も無いだけに、これと言つて又長所も無いので、躰も亦瘠せても
 居らねば、肥えても居らぬといふ中間で、素より姿に意氣といふ格は望
 ひ可らず。何處までも野暮臭い奥様として出来て居るので、色氣の華美
 なフランネルの上に、少しく紋は黄ばびでは居るが、黒縮の羽織を引掛
 けて居ても、らツともそれが目立たぬので以て、總躰を判じろのにあま
 り有りと言ひつべしだ。これでは小間遣ひが人の噂をするのを、留るの
 は道理なので、いつでも斯う頭を押へられるのは、知れ切つて居るもの
 を、今日も懲りずまに言出したのは、年頃の所爲か、おしやべりの質で

か、但しはよく／＼可笑く感じたからであるのか、又直ぐ繰返して。

「でも奥様、本統で御座いますもの。妾には彼の方の仰有る事が能く分らないのですもの。それですのちよい／＼氣取つた事なんか仰有るものですから、尙分りは仕ません。本統に妙な方ですぬえ、可笑な事を仰有つて、人を御笑はせなさるかと思ふと、又口もきかないで鬱ぎ込んで、だんまりで考込んで居らッしやるのですよ。其時の御顔……いえ、又申すやうですが、其時の御顔と言つたら、眉毛と眉毛との間に深い切疵のやうな立の筋が出来て、眼と言つたら、きり／＼と釣し上つて、如何も可恐う御座いますよ。妾は彼の御眼を見ますと、何んですか身軀が寒氣が仕て来て、可恐くツて、可怖くツて、如何も静として居られなくなります。如何いふものでせう、奥様、奇跡な事も御座いますものですぬえ」

と基石を拭く手を休めて、仇氣なく細君の顔を見ながら問ひかけた。

「さア、如何いふものかねえ」

いくら問ひかけても、素より問題として成立たない無用の件であるから、これに説明を興へるべき限りでない爲に、細君は斯う答へた。小間遣ひは中々以て、それで安んじない。子供が草艸紙の繪解きを仕て貰ひながら、此次ぎは如何なりますと、根問ひ葉問ひするやうに、膝まで進ませて問掛けて。

「奥様、如何いふもので御座いませう。妾は彼の眼が、最うくく可恐くツてく、いやあアな心持になるので御座いますよ」

「そんなかねえ、妾は生憎其様な時を知らないから………平常は優しい眼をして居らツしやるぢやアないかえ」

「優しい！ 奥様、其優しいのが又妾には厭で厭でならないので御座います。丸で其優しい眼を御仕なさる時は、腫が解けて流れて仕まやア仕ないかと思ふ程、いやらしい眼をして………」

「最^も御止^ししよ、そんな事^{こと}を申^ましては悪^{わる}いよ」

「でも貴女^{あなた}、妾^{めかけ}ばかりぢやア有^ありません、千^{せん}だの、萬吉^{まんきち}だの、皆^{みな}、然^さう申^まして笑^{わら}つて居^ゐりますよ」

「それは好^よくないよ、お前^{まへ}がお千^{せん}や萬吉^{まんきち}の真似^{まね}を仕^しなくツてもよろし

し」

「いえ、千^{せん}だの萬吉^{まんきち}などは、末^まだ酷^{ひる}い事^{こと}を申^まして笑^{わら}つて居^ゐりますよ。彼の今^{こん}度の書生^{しよせい}さんは、名^な前^{まへ}からして可^か笑^{せう}いッて……田^た母^ぼ橋^{はし}右^う太^た郎^{らう}ではない、田^た圃^ぼ沙^さ魚^{ぎょ}だなんて……」

「酷^{ひる}い事^{こと}を……」

「おほ、おほ、田^た圃^ぼ沙^さ魚^{ぎょ}ですツて、酷^{ひる}い事^{こと}を、おほ、おほ、如何^{いか}してあんな方^{かた}を書生^{しよせい}さんに、東^{とう}京^{きやう}から御呼^{おほ}びなさツたの、御用^{ごよう}は大概^{たいがい}大瀧^{おほたき}さん一人で間^まに合^あつて居^ゐりますのに」

「それはね、少^{すこ}し譯^{わけ}が有^あつてね、のッびきならない事^{こと}で、彼^あの方^{かた}をね、

東京から引取つたのだがね……其譯はまア言ひますまい。お前は又御しやべりだから、方々へ言つて吹聴するといけないから』

「奥様、妾は申しはしませんよ。如何か聴かして頂戴な。決して誰にも申しはしませんから』

碁石の方は丸で手を明けて、何處までも奥様々々と子供らしくもたれかけて問ふので、氣に入りの小問遣ひでもあり。大した事ではなければ他の内所事の二三件、或時に話した事も有り、下女のお千と違ひて、東京から連れて來た出入りの西洋洗濯屋の愛娘なれば、語るまじき事ながら、秘密の口を解いて聴かせやうかと、細君も布巾を手から放して、烟草にしながら、そろ／＼と序開き。

「でもお前、此間も妾の帯をこしらえた事を、決して御近所の奥さん達にはいふのではないと言つておいたのに、いつの間にも最う東山の奥さんや西川の御嬢さんに、お話し申してしまつたぢやアないか』

「御帶の事で御座いますから、つひ申しましたので。他の事なら如何致しまして」

「屹度言はないかえ」

「屹度申しません」

前の言葉より力を入れて。

「屹度言はないかえ」

同じく力を入れて。

「屹度申しません」

「それなら話して聴かして上げるがね、これを本統に口を濁べらしては大變だよ。妾は最う然うなると、旦那様に申譯がないのだから、第一家の體面にもかゝはる事だからね」

「大丈夫で御座いますよ」

「本統に好いかえ、人にお言ひだと聴かないよ」

これ程までに念を押すのだから、中々以て容易ならぬ大秘密でもあるに相違ないと、眼を見張つて、其丸くなつて居る臉を、ぱちくり／＼爲せながら。

「奥様、決して申しませんよ」

「それなら話さうがね、彼の田母橋さんはね、旦那様の御親類だよ」

「えッ、御親類」

親類の息子を書生同様にして置くのは、例の無い話ではなし。ちツとも不思議な事ではない、それを大の念入りで、内所にして話さなくツても好さそうなものだがと、小間遣ひのお時は考へながら。

「然うで御座いますか。それなら妾は、あんなに悪く申さなかつたらよろしかつたのに。奥様、如何か御免をそばせ」

と平に謝まると、奥様は、そんな事は如何でも好いといふ風で、それよりは一生懸命に辯護しなければならぬ事があるといふ意氣組で。

「いえ、それがね、御親類と言つても、もう、それは、餘程遠い縁つ
 いきなので。言つて見れば他人も同様なのだがね。仕方がなくツて此方
 へ引取つて、世話を仕なければならぬやうな義理合で……」
 何んだ、益々つまらない。前觸の半鐘では如何にも大火事らしいやうで
 有つたが。其つもりで表へ飛出して見ると、存外下らないボヤ。話はこ
 れで消え掛かつたのを、つひ、不圖したお時の言葉から、以外の邊に火
 の手は上つて來た。

「さぞ種々御物入りで御座いませうねえ」

これが其消えか、ツた時に何んでもなく、つひ、言つたお時の言葉。

「いえ、物入りは少しも無いのだよ。彼の田母橋さんは、他の書生さ
 んと違つて、財産は可成御有んなさるのだけれどね」

これが實に以外の邊に火の手が上つた、それに比する細君の言葉。

「へえ、それで又東京から此千葉まで……彼の書生さんに御成りな

さつて………矢張親御の御傍では、御勉強が御出来なならないと申すやうな事ですか』

『親御は疾くから無いのだよ』

いよ／＼火の手は以外の邊を潜り廻つて上つて來出した。

『まア、然うですか』

『親御が無くつて、矢張遠縁の原庭さんで引取つて、これまで世話をしてお出でなさつたがね。あまり如何も道樂が激しいので、逆も東京では勉強が出來さうも無いのでね、それでまア田舎ならば少しは好からうといふのでね、此方へ何する事に爲つたのだよ』

『未だ御若いのに。まア、道樂を。驚きましたね。未だ十七八か、そこいらで御座いませう』

『あら、お時、厭だよ。道樂と言つても其方ではないのだよ』

『おは、然うですか。まア、妾は、何んて氣が早いのでせう。そ

れで奥様、どんな御道樂」

「お前と同じ道樂でね」

「妾と同じ……え、奥様、本統で御座いますか」

「お前のやうにね、田母橋さんはね、三度の御飯を一度にしても、御芝居が大好きだよ」

「おは、は、は、は」

「お前何を笑ふのだねえ。御仲間が出来て嬉しいのかえ」

「いえ然うでは御座いません。あんな方でも芝居が御好きだと思ひます」

「馬鹿な事を御言ひでない、どんな方でも好きなのは好きだよね。彼の方の好きは如何も別して好きなので、原庭さんの家から毎日學校へ通ふやうな振をして、それで朝から芝居見物。勿論御小遣が餘分には渡らないから、土間や棧敷といふ譯ではなく、大入場が見立位が精

々だらうが、それにしても東京中の芝居を、大歌舞伎は言ふまでもなく純帳芝居まで覗き歩いて、それでちツとも勉強は爲さらず。家へ歸つては密と假聲や身振をして、好何も仕方が無いのだとさ。いくら呵つても御さゝなさらぬものだから、原庭さんも持餘して、それで此方へ御よこしなされたのだが。此地には滅多に芝居は無し、有つた處で旅役者の事だから、碌な事は仕なからうし。恰好いゝのでね、それやこれやで家へ来たのだがね、原庭さんの處で、構はなくなる。妾の家でも見放したら、本統に彼の方は行き處が無いのだよ。如何かまア立派な人に成るやうに勉強お仕なされれば好いが、困つたものだね。旦那様も最う今から心配しておいでなさるのだよ。實は彼の方は、他人より何層倍も勉強して、立派な方にならないと、如何してもならない譯があるのだがね」

「へえ、それは奥様、如何した譯で御座います」

「それは如何も……」

口籠つて居る折柄、玄關の方に車の響。主人が役所からの歸宅と、あわて、出迎へる爲に立つて行く二人。残る基石は、いつか又拭はねばならぬまい。残る話も其儘では。

其二

千葉地方裁判所在勤の検事三田浦弘が、猪の鼻臺下の邸内、書生部屋はいづれも同じ、玄關を横にして、應接間を後にして、前は格子窓、障子には一二枚の硝子を入れて、これから門口を見渡せるやうになつて居る。其處に二脚の机が置いてあつて、これに向つて居る二人の書生、一人は二十四五歳。瘠形の神経質らしい人で、一人は小間遣ひのお時が口から形容した人相骨格、其儘である處を見ると、これぞ彼の田母橋右太郎に相違あらぬ。すれば瘠形の一人は大瀧と其姓名を呼ぶのであらう。

前から居た書生といふのは此人であらう。
 大瀧の机の四邊には、法律書や講義録や判決例といふやうな書類が散亂して居て、今は連りに岡田氏の日本刑法論を勉強して居るのに、これに反して田母橋の方は、只茫然として机の前に坐つて、申譯だけにはナシヨナル讀本の四巻が開いてあるばかり。辭書も傍には置いてあるが、會てそれを繰つた事は無い。前の讀本も次の頁を開いた事はない。机と窓との間に置いてある洋燈の心を氣にして、出たり引込ましたりして、同じ事に只何となく時を費して居る。
 大瀧は時々此方を見て、苦々しい顔をして睨むでは、別に話もせず、直ぐ又中音で讀書を續けて、甲誤まつて乙を殺しなど、血腥い研究に熱して居る。

いつの間にやら田母橋は、机の引出から小さな鏡を取出して、それに向つて種々な顔を寫して見て居る。眉毛を釣上げたり、口を曲げたり、眼

の玉を真中に寄せて見たり。

奥では主人夫婦の、最早や眠られたと見えて、音もなく。臺所もやうやく静まつて、下女も車夫もそろりと寐る支度。

此時小間遣ひのお時の聲で。

「まア此の御座敷の雨戸が未だ締らないで。あら、それに雨でも降りさうなのに、庭下駄が出しッ放しで……」

此聲を聴いた大瀧は、讀書を止めて、田母橋に向ひ。

「君、不可ぢやないか。此所へ來てから最う二週間からになるぢやらう。少しは勝手も分つたらうに。毎晩のやうに雨戸を締めるのを忘れるぢやアないか」

「あッ、然うでしたッけ」

田母橋は初めて氣が着いて、慌て、鏡を隠しながら答へた。

「然うでしたッけぢや困るぢやないか。毎晩だせ。君。自分の責任だ

けは果し給へな。晩方になつたら玄關と客間との雨戸を締めて、庭下駄を上へ揚げて……何んでもない事ぢやアないか。君が来ない内は僕一人で、他の用と一所に遣つて居たのだよ。それも君が勉強して居て、急がしいといふなら仕方がないが、君は實に怠けてばかり居て、けしからん話だ』

此言を聴くと田母橋は、ぶり／＼怒つて、額に立の筋を現はしながら、返事も爲す、膨れた儘で立つて行つて、荒々しく雨戸を締切つて、足音高く踏鳴らしながら、未だ怒氣を含んだ儘で歸つて来た。此舉動が大瀧の神経に觸れて、甚だ感情を害したと見えて、田母橋の歸つて来るのを待構へて居て、座に着くや否や、突如。

『君は實に不可よ、僕の言つたのが氣に入らなければ、正々堂々と其理由を論じるが好いぢやないか。何も雨戸や畳に強く當り散らさなくツても好さそうなものだが。君の舉動は實に婦女子的だよ。男兒の爲

すまじき行だよ。少し謹んだら好いだらう。それで、最少勉強仕なければ、僕は先生に言告げるよ。然う怠惰では仕方がないぢやないか』

田母橋は此忠告に對して、一言の返答もなく、益々膨れツ面を大きくするばかりで、洋燈の心を、ひねくり廻はす事故の如しだ。大瀧は呆れて仕まつて。

『君は僕の言に對して答へないね。無言の侮辱を僕に與へたな。好し、勝手に仕給へ、僕は最う決して君と言を交へないから』

言ひ捨て、更に机に向き直り、今度は聲を高めて書籍を朗讀し始めた。田母橋は腕を組んで、彼の眉間の皺を深めた顔を此所に埋めて、一生懸命に考込んで仕まつた。

勝手の方では彼此する内に、鼠が荒出した。午後十二時、最う皆誰も寢入つたのであらう。

此方の書生部屋では、勉強家の大瀧のいつまでも眠らずに勉強すれば、怠惰漢の田母橋も亦眠らずに考へて居る。大瀧の聲はいつしかに低く爲つた。深夜を慮つての故であらう。田母橋の腕組はいつしかに解けて、連りに眼の端を撫て居る。これは泣いて居るのらしい。

大瀧は、田母橋の泣出したのを知らぬでも無いが、少しも頓着しないで、勉強を續けて、過失だとか、故意だとか、謀殺罪に問ふべしとか、故殺罪であるとか、一頁朗讀しては又繰返して讀直し。それを腦中に疊み込む事に熱して居る。田母橋に對しては冷かなものだ。

此様にして又時は過ぎた。奥のボン／＼時計は一時を報じた。

此時田母橋は耐らなくなつたといふ風情で、大瀧の方に顔を向けながら、如何にも沈んだ水の底からのやうな聲で。

「大瀧さん、大瀧さん」

大瀧は最う二三頁を讀んだなら、お仕舞にして寝やうと思つて居る處な

ので、今話掛けられるのは甚だ面倒臭いのであるが。

「何んだ、君」

「大瀧さん、私が悪かつたです。私が悪かつたですから、如何か勘忍して被下い。以後は決してあんな事は仕ませんから、それで何んでも氣を着けて働きますから」

意外である。ふり／＼怒つて居た先きの勢ひでは、今にも喰つて掛りさうに思はれたのが、我折れたのか、恐ろしく憫れッぽく出たので、大瀧は少し心組が違つて。

「然う氣が着けば好いさ。其つもりで勉強仕給へ」

と言ひながら、僅かの残りの頁を讀んで仕まはうとした。

「大瀧さん」

又田母橋が呼んだ。

「何んだ、君」

「大瀧さん、これからも私が悪い事が有つたら、如何か注意して被下い。私は他から言つて貰はないといけなものですから……今まで言つて呉れる人が無かつたのですから……私は此家へ来て、先生の世話に爲つて居るのですが。此所の先生から見放されると、最うたよる先きが無いのです。それから又君の感情を害して仕まつては、私は心細くツて仕やうがないのです。私は實に世の中にたよりない身上、恐らく私くらゐ不幸な者は無いのですから……私には皆敵ばかりで、一人として同情を表して呉れるものが無いのですから』

と言ひさして、咽ぶ程に泣出した。

今まで腹を立て居たものが、急に打解けて話掛けたのが奇。心細い身上、他にたよるべき處がないとて泣出すや益々奇。田母橋の舉動は裁判醫學上から見ると、發狂者の一原素は確かに備へて居るやうだと、大瀧は思ひながら。

「それア君が怠けてばかり居るから、誰だツて同情を表さないのだ。東京に居た頃は芝居ばかり見て居て、ちツとも學校へ行かなかつたといふぢやないか。だから原庭さんからも見放されたのだ。全躰なら田舎から東京へ勉強しに出るといふのが通常なのに、東京でいけなくツて、田舎へ送られるなぞア異例といふものだ。僕なんぞア學資が續かないものだから、仕方無しに先生の家へ御厄介に爲つて、此方で東京から講義録を取つて勉強をして居るのだ。そして一日も早く辯護士試験の及第を仕やうと思つて、一生懸命に爲つて居るのに。君は何んだ、此地へ来て二週間にもなるけれど、同じ賈しか見て居ないぢやないか。そんな事ではいかん、充分に君が勉強すれば、誰だツて君を立てるやうになる』

『いえ、駄目です。私はいくら勉強しても駄目です。私は最う駄目です』

と言つては、又さめくと泣く。

「勉強しても駄目だ。そんな馬鹿な事が有るものか。何か君は考へ違ひをして居るのだらう」

「何んの考へ違ひであるもんですか……君は私の身上を知らないからです」

「それア知らないさ。君の身上を委しくは知らないからツて、過去の事は如何でも好いさ。これから後は腕次第で、立派に社會に立たれるのだから……」

「そんな事言つて、だから君は私の身上を知らないのです。私が如何して社會へ出られるものですか」

連りに言ふ處を以て見ると、何か其處には深い事情のある事であらうと、大瀧やうやく其方に氣が着いて。

「全駉君の身上といふのは、如何いふのだね」

「身上ですか……それア如何も……言ツちや、いけなさいのですがなア」

と言つて、下を向いて仕まつた。

言つて悪い事を聴くでもない、大瀧は其儘にして。

「何んにしてもまア勉強々々、勉強に打勝つ敵は無いのだ」

と言つて、残りの頁を讀出したので、それ切り田母橋も黙つて仕まつた。そして先さへ寝るでもなく、何事かを考へながら、一面には心配氣の相を現はして、大瀧が書を伏せるのを待つもの、如く見える。言つては悪い身上を、それは又如何して語る事が出来ぬのかと、押返して問ふであらうと思つたのに、大瀧は然らば爲す。又々讀書を始めたので、これは機嫌を損じたのではあるまいかと、それが心配でならないので、馴染の少ない此土地、同情を表して呉れる人の少ない此家、加之一室に居る此大瀧生に、悪感情を持たれては、猶尙たよりない身上だ、益々心細い事

であると思詰めた、それ故に、彼の人が讀書が切れて寝る支度でも爲るやうに成つたら、其時更に詫びませう。詫びるには、言ふていけない身上を、此人ばかりには打明けませう。叱る事はある。怒る時はあるが、大瀧生の心の底には、何となく暖かい情が潜んで居るやうに思はれてならぬ。故に、此人には、我身上の秘密をも打明け事に仕ませうと、それを考へて待つて居るのであらう。

『さア寐やうぢやないか』

『私が悪かつたです』

突然兩方の口から出て、これが衝突してお互ひに驚いた。

此位どちらも順序を踏ない會話の冒頭といふのは珍らしい。本を伏せて、それから伸の一つでもして、躰を向直らして、其處で寐やうぢやないかと云ふべきが本筋。其時を待つて、先き身上を明かさなかつたのは、私が悪かつたと詫びるのが本筋。其本通りをどちらも踏まないで、裏道

で出會したから兩方驚いた。中でも大瀧の方が強く驚いた。

『何が悪かつた』

『君に身上を打明けなかつたからです』

『其事か。それなら君、心配する事は無いぢやないか。人には誰しも秘密があるものだ。其秘密を無理に打明け給へど、そんな酷い事を僕には言はない』

『然うです、然うですが……でも、私は種々考へたのです。隠すよりか私の身上を、君に話した方が好からうと思ふのです。實はね、私はね、田母橋鋭一——知つて居ますか、私は田母橋鋭一の息子です』

と言つて上眼づかひに大瀧の顔を見た。

『田母橋……田母橋鋭一……知らないね。君の御父さんが然う言

つたのですか』

『十年ばかり前に、賣國奴々々と、世間から非常に攻撃せられて、

殆ど誰一人取合ふて呉れる者もないやうに爲つて、……」
と言ひさして、袂を掴んだ手で、突如顔を隠して仕まつて、肩を震はし
ながら泣入つた。

「えッ、彼の。ひ、某國の秘密探偵に、觀音崎の背面の地圖を製し
て渡したとか。其洋人と結托して、其他種々我國の内情を探つて知ら
したとかで、一時非常に攻撃せられた。ひ、田母橋だッけ、ふむ、
其人の子が君か」

と呆れて仕まつた。

田母橋は袂の内に頷いた。

「然うか、彼の人の子か、君は……」

でも構はないぢやないか、親父が賣國奴でも、息子は息子だ、少しも構
はぬでは無いかと言つて慰めたい場合でありながら、大瀧の口には、つ
ひ、如何も言切れない。横濱居留地の某旅館に附屬して居たガイドの何

某なる者が、某外國の犬に爲つて、少からぬ金貨を得た。けれども、これ
といふ證據の上らぬので、砲臺附近の秘密圖を、外人の手に渡したとい
ふ罪を問ふ事も出来ず。其他の事は尙更咎める由がなくて、唯社會の制
裁力が、彼を總べての交際の場から放逐した。國民の悉くが擯斥して、
誰一人取合ふ者が無くなつた。富は唯彼に廣き地面と大いなる家作と美
衣美食との數個を興へたばかりで、他の快樂を殘らず奪ひ去つたといふ
事を、十年も経過した今日まで、忘れられない田母橋某。大瀧も擯斥し
て攻撃して、彼が九族を亡ぼすべしなど、其頃は十三四の少年の時代に
も深く思つて居つたので、今日までも其記憶が明かに残つて居る賣國奴
の、その息子。それが此田母橋右太郎であらうとは、意外も意外、驚か
ざらんとしても得ずである。

田母橋はやうやく首を上げて。

「ですから、いくら勉強仕たッて、到底親父の汚點を、私が雪ぐ事は

出来ないのです。世間から親父が見捨てられて、誰一人も取合ふて呉れないやうに、私をも皆擯斥して、賣國奴の兒だ、賣國奴の兒だと、子供の内から悪口ばかり言はれて、友達は一人もなく、ほんの一人ばツちでこれまでに成つたのです。親父も母親も他に楽しみが無いのですから、私を大變に可愛がって呉れました。そして能く芝居へ連れて行つて呉れました。芝居より他には實際他に楽しみを取りに行く處は無かつたのでせう、私も亦芝居より他に面白いと思ふ物は無かつたのです。實にそれは最う芝居は好きで……何處の芝居でも、知らないのは有りません。どの狂言でも見ないのは有りません。芝居は實に面白いですなア。私の眼からは世の中に、芝居くらゐ面白いものは無いので……」

少しく憂愁の顔が開いて来て、上唇を舌の先きで、ちよいと嘗めながら。

「其芝居があまり好きなら、いけないと言つて、原庭さんが此地へよこしたのです。これは本統に言つては悪いのですが、此家の先生は、私の家と遠い親類です。母親の祖父さんの妹の子の其子が、三田浦弘——當家の主人で、それから彼の原庭さんも、矢張そんな様な親類ですが、此家と親類の事は決して人に言つてはいけないと、然ら言ひつかつて居るのです。兩親が二年前に、一時に虎列刺で死まして、他に相談する人が無いものですから、今までは音信不通であつた原庭さんの處へ、親父の遺言に従ふて、世話になる事に爲つた時にも、矢張親類といふ事を人に言つてはいけなないと、言渡されたのです。それで原庭さんも、此家のも、皆勉強して天晴國家の爲に働いて、親父の汚辱を雪げくと言つてはいますが、私の考へるのでは、いくら勉強仕たつて、駄目だと思ふのです。私が假にえらく成るでせう、成つた處で、人は言ふんです。屹度それア言ふのです。彼奴の親父は賣國奴だ

ツて、其子だもの何を爲るか知れないツて』

『一寸待ち給へ、それは君の頭腦がちと間違つて居るやうだせ。斯う考へたら如何だ、親は賣國奴であつたが、息子は立派な愛國者だツて、人に言はれぬとも限らないぢやないか。然うなれば好いぢやないか』

『處が然うは決して人は言はない』

『言はないと思ふのは君の思考であつて、其思考を以て人を想像して見るから、決して好く言はないやうに思はれるのだ』

『それなら君の言ふのも、君の思考で見るとちやありませんか』

『それが既に君の間違つて居る證據だ。好いか、僕の眼で見ると正しいか、君の眼で見ると正しいか、先づこれに向つて判決を下すを要しない。既に現在僕が、親父は悪人だが息子は善人で感心なものだといふやうに、敬服するの一人であつて見れば、それをまで君は打消すには及ばないではないか』

『それなら、君も、私が、彼奴の親父は悪人だと好しや息子が善人であつても、それが爲めに侮辱されるといふたのを、打消すにも及ばないぢやありませんか』

『然う言つて仕まへば、水掛論で、問題にならない』

『ですから、まア、聽いて被下い。私は然う信じて居るのだから、實に勉強してもつまらないのです。私には味方といふ者は一人も無いのです、前に言つたのは私が假に、えらい人に爲つた所での話ですが、私は實際逆もえらくは成れないのです。へえ、も、それは逆も成れないのです。成れなければ成れなくツて、益々私は人から彼此と言はれます』

『あんまり自暴自棄ぢやないか。人間はいくらか自分を買つて居ないぢや……』

『いえ、私は駄目です。私は逆も駄目です。私は逆もえらくは成れないのです。だから私には希望といふ物が無いのです。時々自殺しやう』

かと思ふのです』

『不可、不可、そんな氣を出しては……』

『知つてます、自分でも自殺の悪い事は知つて居るんですが、でも、あまりに考へつめて、つまらない〜と思ふと、死んでしまつた方が好いかと思ふのです。つまり非常に悲しくなつて、又非常に物淋しく感じるのですねえ。毎日々々穴へでも引込まれるやうに思ふのですねえ。東京に居ると、其物淋しくつて耐らない時には、いつでも飛出して芝居を観に行つたのです。彼の人込の中へ這入つて、大勢の中で賑やかな事を見て居ると、それで少しは氣がまぎれるのです。それが此方へ来てからは、見られないのです。私が芝居を観にばかり行くといふのが、悪いといふので、此千葉へ流刑に處せられたのですが、私は最う實に悲しくつて淋しくつて心細くつて……實に如何も困つて仕まつのです。こんな場合ですから、大きな聲では言はれないのです』

が、厳格な主人、冷淡な細君、親類といふなど言渡しのある程で、ほんの仕方なしに義理一片で、私を引取つて被下つたのである、とは知つて居ても、それが私には酷く嬉しいので、通例から見たら極めて冷淡なあつかひでせうけれど、私に取つては、大變に親切なやうに感じられるのです。

私は喜んで居るのです。如何かいつまでも此所に世話に爲つて居たいのです。此所で愛憎を盡かされたら、他に行處は無いのです。大瀧さん、こんなに私はたよりない身上ですから——これだけ何も彼も残らず心中を打明けて話したのですから、私を可愛さうだと思つたら、如何か擯斥せずに、親しく交際をしてください。私は實に、君に怒られて口も聽かずに居られると、心細くつてならないのですから』

嗚呼、遺傳か、境遇か、自分で自分を意久地無しにして、四面を悉く

敵に見て、世を狭くして居る此少年。嗚呼誠に以て不憫な者だと、大瀧もつひ此不幸兒の上に涙を注いで。

「實に君は氣毒な身上だなア、悲惨だ、實に悲惨だ」と大瀧は叫んだ。

其三

昨夜といふより今朝といふ頃まで起きて居て、自分の身上を残らず語つて、大瀧の心を動かして、其同情を得たので嬉しくつてならぬ田母橋は、いつもより早く起きて、受持の雨戸を首尾好く開いた。

それから應接の間、此所は半洋風の室で、絨氈が敷いてあつて、卓に椅子、硝子窓が有るかと思へば、此方には床の間がある。其所に掛物の軸はなくて、大きな姿見鏡が置いてある。

此所を一端掃出しておいて、雑巾を掛けるのは晝後に爲るのが此家の例

である。

故に、此所を一通り等を掛けて、それから主人が出勤の要意として、車夫が毎日磨いておく靴を、玄關の敷石の上に並べておいて、それから東京の新聞と官報と此地發行の東海新聞とを奥へ持つて行つて、彼此する内に主人の出勤となる、家内中で送つて出る。それから晝頃までは用が無いので、雨の降らぬ限りは、猪ノ鼻臺へまで散歩に行くのだが、生憎の秋雨に、それもならず。今日は特別で、應接間の雑巾掛けを試みた。寢坊で雨戸を満足に開いた事の無い人が、早くからこれを開き。官報や新聞は、小間遣が、催促に来ねば、持つて行かない人が、忘れずに持つて行き。晝後に拭くべきを、朝の内に遣るといふ、凡べて異例を見せたので、大瀧は驚いた。如何か此調子で長持が爲れば好いと思つて居る。田母橋は應接間が大層に好きだ、馬鹿に氣に入つて居るので、間が有れば其處に行つて居る。何をして居るのか誰も知らぬ。

小間遣ひのお時が受持は、應接間の烟草盆を掃除する役目だ。それで、何心なく戸を開いて入つて見ると、驚いた、姿見の鏡の前で、裾をまくつて胡座を組み、雑巾を鷺づかみにして、反身に爲つて、變な口つきをして、何か連りに言つて居る。それは田母橋が、是正しく音羽屋を氣取つて居るのである。

あまりの可笑さに吹出して笑ふと、吃驚した田母橋、慌て止して、眞赤な顔をしながら急に雑巾掛を始めた。其萎氣さ加減といふものは、實に却つて見た方が氣毒な位。其所を遠慮の無い年の若さの仕方無さ。思切つてお時が笑ふので、益々田母橋は極りが悪い、此小間遣ひは、何んでも人の事を笑つて、此方の失策を何から何まで見たら最後、細君に言付ける。此間帯の先きで花瓶を引覆したのも、それからハタキで障子を破つたのも。車夫の居なかつた時に代つて靴を磨いたのに、ちつとも艶が出なかつたのを、彼の方は何んでも不器用だ、靴を一ツ磨く事が出

来ないなと言つた。我の失策を見付けるのが役目のやうに仕て居るのだもの。昨夜も昨夜、雨戸を締めるのを忘れたのを、大きな聲で吐鳴る。面白がつてか、意地悪でか、實に最う一々言告げられるので、其たびに細君が、さもく可厭顔をする。細君が又それを主人に告げると見え、これも亦苦々しい顔をする。それを見るのが實に耐えられない。膽玉が縮んで、再び膨れぬやうに思はれる。此奴が又奥へ行つて、田母橋さんが、鏡に向つて、役者の眞似をして居たなど、屹度しやべるに相違ないと思ふと、いよく以て萎氣ざるを得ずだ。

「田母橋さん、そんなに萎氣なくつても好いちやありませんか。もつと遣つて御覽なさいな」

「いや最う御免だ。なに、一寸、遣るツていふ程の事は無ので……」
「さぞ又酷く笑殺するだらうと思ひの他、もつと仕て見せるとは意外であつた。」

「貴郎は大層芝居が御好きですッてね、奥様から承はりましたよ」
 「虚言です、そんな事は……」

「あら、隠さなくツても好いぢや御座いませんか。妾も芝居は大好きですよ。ですけれども、此地へ来ては如何も見られませぬねえ。他に何は無いのですけれど、そればかりがねえ、本統に悲しいのですねえ」
 敵と見えしは群れ居る鷗、これが芝居好きの一味であらうとは、又意外で、昨夜得た大瀧の同情よりは、一段嬉れしく田母橋は感じて。

「芝居は好きですか、貴女も……」
 と最う顔を崩して笑出した。

「大好き！御飯なんか頂かなくツても好いの……貴郎は誰が御愛顧」
 「私は音羽屋」

「えッ音羽屋、然うですか、嬉れしいのねえ、妾も大の愛顧」
 役者まで同じ愛顧とは、又符合した。

「では音羽屋の岩藤、それ彼の骨寄の。あれを御覧なすツて？」

「又助と一所に仕た時……見ましたとも、福助の二代目尾上で……」
 實に好かつたですぬえ」

「それぢや名人長次は……」

「中幕が五日替りで、車引だの、菊畑だの、辨天小僧など仕た時でせう。實に好かつたですぬえ。私は五日替りの狂言をすツかり見て知ツて居る、彼の時後藤も仕た」

「それは妾は見なかつたの。好かつたでせうねえ。それでは彼の成田屋と一處に歌舞伎座へ出て、それ、彼の、墨染になつたのを見たでせう。彼の時」

「ぢや、其後に忠臣藏をして、彼の平右衛門を仕た時、そら彼の茶屋場で、彼のお軽を切掛ける處、斯うやつて、そら、刀を抜いて……お軽が彼の鼻紙を投げる……」

身が入つて、知らず／＼手真似をして、持つて居た雑巾をお時に打付け
た。
お時は轉がる程笑出して、笑ひ留らぬ内に此所を去つて、奥の方へ走つ
て行つた。
又失策つた、彼奴屹度細君に言ふだらう。加之大袈裟に吹聴するだらう。
又細君に厭味のやうな冷評を言はれて、主人からは噛付かれるやうな小
言を受けるのだな。實に彼の小間遣ひ女、悪むべき女だ、仕方の無い女
だ、と思はず知らず拳を握つて、向ふを睨む眼の据え方。それが最う演
劇的だ。

其 四

彼の小間遣ひは、田母橋の失策のみを密告するのではない。下女のお手、
車夫の萬吉、書生の大瀧のでも、誰のでも構はぬ。遠慮なく細君に話し

て仕まふのだが、殊に田母橋の失策が多いから、此頃では此人一人で持
切つて居るので、これを田母橋の方から見ると、自分の事のみ密告する
やうに思はれるのは、穴勝僻み根性といふ譯でもないのだ。
扱てお時の性質は、人を讒訴して以て自分の快を取るのかといふに、然
うではない。一々細君に言告けるのは、決して悪意のある故ではなくつ
て、唯人の失策が何處までも可笑くツて仕やうがないので、それを言つ
ては其人の迷惑になるから、なといふ、そんな見界のあるのではない。
何所までも、子供——或點までは子供と言つて好いのである。それを又
主人夫婦は愛して居る。子供の無いので娘同様にまでとは行かぬが、他
の女中などに比すべきでない。一方ならず寵愛して居るので、それはつ
ひ誤解されるのである、彼はそれを鼻に掛けて益々我達のアラを探しや
アがると、實は車夫の萬吉までが、腹を立て陰言を吐く事もある程だ。
流石に大瀧はこれを知つて居るので、毎度田母橋が立腹して、彼の畜生、

たいでは置かないと、連りに怒氣を洩らすのを、いつもくなためて居た。なだめられると又其當座は、承知して、黙つて居るが、少時立つと又怒り出す。直ぐ軟らいで、又怒る。

それ程嫌つて居るお時でありながら、芝居の話となると、夢中に爲つて、非常に打解けて語合つて居るが、又してもく、假聲を遣つたとか、身振をしたとか、必らずそれを素業抜かれる。然うしては又腹を立て、撲るの、殺すのと、騒出す。車夫の萬吉が煽動する。此男も陰では自分の悪口を言ふて居るとは知らずに、浮波と乗つては、感情を激せしめる。これをいつも留めるのは、大瀧で、大瀧の言葉は能く守る。好しや一時は逆らつても。

此位信用して居る大瀧、それに向つても時々衝突する。後には自分で謝びる癖にだ。

けれども大瀧は、彼のお時が、悪意無しに人の失策を密告するといふ事を看破して居る如く、田母橋の眞情を知抜いて居るので、然ういふ時はいつでも構はないで置く。果して時間が過ぎると、向ふから折れて出て来る。

大瀧は、田母橋の世に不幸なる孤兒といふ事を知り。其孤兒は境遇の爲に、恰も彼の体格が不釣合である如く、彼の精神が常に平均を失ふて居るといふ事をも能く知り、極端から極端へ走る感情の急變に、薄弱なる他の物が壓倒されて、智力も鈍い、意志も弱い、發達するのは情感ばかりで、言はい情感の化身と言つても好いやうな人間といふ事をも知り。此儘で進んだなら、どんな間違が起らぬとも限らぬといふ事をも知つて居るので、成るべく寄らず觸らずの方針を取つて居るので、従つて彼が能く馴染み親しみ、天にも地にも只一人の同情者として喜んで居るのである。

大瀧は更に一步を進めて、出來得るならば、自分から狭くして居る境の

内から、救出して遣りたいものだ、其方法を考へぬでもなかつたが、
 茲に十一月中旬、彼は首尾能く辯護士誠諭に及第して、法服を着るべき
 身分と爲つたが、自力で事務所を開くだけの財産は無論ないので、止む
 を得ず、三田浦検事の家を出で、長洲の何某辯護士の事務所へ入る事に
 爲つた。

去るに臨んで大瀧は、呉々も田母橋に忠告した。悉く彼の欠點を擧げて、
 反省せしめたが、其時だけは能く分つたのであらう。涙を流して謝した。
 最うこれまでの様な事はない、大丈夫であると、立派には言切つたが、
 扱て。

同じ千葉の町内ではあつても、一ツ家に大瀧が居らぬやうに爲つて見る
 と、左なきだに物淋しくてならぬ田母橋。一人では書生部屋に寐る事も
 出来ないといふ始末で、萬吉を頼んで夜だけは來て貰ふので、此事件か

* * * * *

ら田母橋の臆病だといふ事が知れ渡つて、例のお時が笑ふ事笑ふ事。

間もなく主人の言を細君から傳へて、書生部屋へ車夫を寐かせるといふ
 のは不都合だとして、中止を命せられたので、田母橋は大いに恐入つて、
 又一人で寐る事に爲つたが、如何にしても可怖。されば何が可怖といふ
 事なしに、唯恐ろしくつて如何もならぬ。

これも彼のおしやべりが密告した結果だと思ふと、腹が立つて、四五日
 は顔を見ても物も言はなかつたが、それでは益々淋しいので、負けて口
 を切つて、いつも應接間で芝居話。此頃は、さうく身振假聲の素葉拔
 きを爲ぬやうに爲つたが。仕ても珍らしくないのでか、細君の厭な顔も

主人の苦い顔も見ぬやうに成つた。
 後には芝居話も種切で、新しく仕込まない限りは、興に乗じて語る事も
 ないので、唯、見たいねえ、見たう御座いますねえ、今度は何座で誰が
 何を爲るなど、新聞の雜報を見ては話す位。

大瀧が居なくなつて、淋しくつて、心細くつて、如何にも斯うにもならない田母橋は、誰か此所に力に爲つて呉れる人が欲しくつてならないので、どあつて、これを迂濶に外に求むべきでない、滅多に人には近寄られぬ。

かゝる場合に人が立つたら、空想に耽けるより他にはないので、田母橋は實に其轍を履んで、全くの空想家に化して仕まつた。始終飛んでもない空想ばかり走らして居る内に、稍實際に近い一つに突當つた。それは此行先、原庭さん、當家の主人、又大瀧生、共に、勉強して、某事業に成効して、それで亡父の不名譽を取消せと勤めるのであるが、自分には進めそれは出来ない。只多少財産があるから、それで一生安樂に暮らして、世間に見捨てられ自分からも見限つて、それで唯芝居だけは毎日見て、それで終りたいものだ。それには彼の、お時のやうな芝居好きで、お時のやうにおしやべりで無い、容貌は彼で好い、彼様した風の女

を得て、妻に持ちたいものだといふ、是であつた。少年の遊戯時代から、青年の戀愛時代に、田母橋が轉すべき期會は、唯一の快樂で有つた觀劇を禁じられて東京から田舎へ移つて來た時に萌して、おのれを知る唯一人の友が去つた時に熱して來た。

其 五

十二月のすゑ、或夜細君は下女のお千を連れて、本町の某氏の許へ用談に出て行つた跡に、裁判所から小使が飛んで來て、寒川新田で殺人罪が有りましたから、早速御臨檢を願ひますとの事。それといふので、車夫の萬吉に支度を爲せて、主人の檢事には直ぐ様出張して仕まつた。留守はお時と田母橋との唯二人だ、お時は茶の間の次の間に。田母橋は書生部屋につくねんとして居たが、左なきたに大の臆病漢が、廣い屋敷の中には我より他に一人しか居らぬといふに先づ臆氣立ち。寒川新田に

殺人犯が有つたと聽いては、いよく此夜が恐ろしく、机の前の窓の硝子の向ふから、誰やら覗くやうに思はれて、如何も成らず。雨戸が締つて居るのに、其様な譯は無いのだが、所謂魔が指して、これは我を恐喝するのだなと思ふと、最う如何しても一人で居られなくなつて、飛ぶが如くに書生部屋を出る途炭、客間の逆柱がびしんくと裂ける響。突當る戸障子を、悉く開いた儘締める事を爲す、走つて茶の間の次ぎへ行つて見ると、此所ではお時の平氣な顔をして、のし餅を俎の上に載せて、菜切庖丁で雜糞に入れるやうに、四角形に切つて居た。

「お時さん……………」

突立つた儘で田母橋は言つた。

「田母橋さん、如何したのです。眞蒼な顔をして……………一人で可怖もの

だから、逃げて來たのでせう」

笑ひながらお時は言つた。

「ない、可怖もんか……………淋しいから來たので」

と言ひながら、細君が居ないので、ずつと大きく成つて、火鉢の前へ坐り込み。

「人殺しがあつたツてね、人殺しが……………寒川新田で……………」

「そんな事は珍らしくは有りませんわ。お役が検事ですから、こんな事は毎度ですよ」

「でも、私が來てからは初めてだ……………何んで殺したのだらう、刀でか知らん、誰が殺されたんだらう、女か知らん」

「人殺が有つたなんて聽くと、好い心持は仕ないでせう。貴郎一人で可怖でせう。今夜萬吉でも頼んだら好いでせう」

「先生から又叱られるからぬ」

「それなら妾が泊りに行つて上げませうか……………」

「え、泊りに……………そんな事……………猶酷く叱られらア……………」

とは言つても、にや／＼と笑ふた其顔、眼は確かに細くなつた。常から細いのが一層。

「叱られたツて好いぢや有りませんか、妾はいくら叱られたツて平氣ですわ……………」

「お時さんは平氣でも、私は平氣にはなれない。それにお時さんの叱られ方と私の叱られ方と大變に違ふからね」

「そんなに貴郎、叱られるのが可怖のですか。今夜のやうな晩に、一人で寝るのと、どちらが可怖御座んす」

「それは同じ可怖くツても、泊りに來て貰つた方が好いけれど、其所が男と女だからね」

「左様さ、妾が男で、貴郎が女のやうですからね」

「何故、私が女の様で……………」

「でも臆病ぢや有りませんか、それが證據には一人でお淋しいので、逃出しておいでなさつたぢやアありませんか」

言はれて見れば、それに違ひないので、田母橋は無言で閉口の体。

「此所へおいでなさつたくらいなら、貴郎も手傳つて被下い。澤山の御歌賃ですから、中々一人では手が廻りませんわ。今夜中に切つて置かないと、最う翌日の晩は堅くなりませうからね」

「手傳つても好いさ、それア私は手傳ふけれど、今夜……………今夜ねえ、私の處へ……………泊りに來て呉れば」

「えッ」

と言つて、お時眼を丸くした。

「奥へも勝手へも、誰にも知れないやうに來て呉れたら……………」

「行きますとも」

斯うはお時の答へたが、變な事を田母橋は眞面目で言ふと思つた。初め、泊りに行つて上げませうかと、此方から言出したのは、ほんの串戯も串

戯、何の氣無しに言ふたのであるが、如何やら田母橋から切出したのは、一物有つての上らしく思はれる。

それに、火鉢の前へ座つて居る顔、逃げて来た時の眞蒼の色は消えてしまつて、何んだかにこりくと笑ふて居る鹽梅、眼も鼻も溶けて流るやうに見えて居る。

「お時さん、屹度ですか、私は話があるのだ、本統に私は話したい事があつたのだ屹度ですよ、お時さん……」

火鉢の前から乗出して、膝小僧の出るのも知らぬ位。

「そんな事言はずに、まア御手傳ひなさいよ」

「手傳ひますよ、それア喜んで手傳ふから、ねえ、お時さん……」

「まア臺處へ行つて、庖刀を持つておいでなさいよ」

「持つて來るとも……」

最う可怖のを忘れて仕まつて、欣然として臺處へ行つて、そして出及庖

刀を持つて來た。

「あら、それは肴を料理するのですよ。菜切でなくツちやいけないので

すよ。でも、能く間違はずに、刺身庖刀を持つて來ませんでしたね」

斯う冷評しても此時には、何となく嬉しいやうな氣が充満ちて居る田母

橋であるので、少しも腹を立てぬ。お時の俎の向へ出及を持つて坐つた。

「おやく、矢張それで切るのですか」

「何んでも好いちやアないか、切りさへすれば」

「如何か巧く切つて被下い」

斯う言捨て、お時は急々と餅を切り初めた。只一人差向ひで、あまり深

く話してはと思つて、ばつたり、おしやべりの口を封じた。これに對し

て居る田母橋は、未だ餅を切出さない。それでお時が爲るのを如何にと

見て居る、其白い手が、柔かな餅を、ざくりくと切る、それは巧みに

眞四角に切る、見て居ると實に面白いやうだ。

田母橋は、其白い手をのみ見て居ない、柔かな餅をのみ見ては居ない。實にお時の顔をつくつくと見て居るのだ。そして惚々として眼尻を下げて居るのだ。

お時が何んでも漏らさず細君に、自分の事を言告げるといふ事を、此時は思はない。それ故これまで幾度となく衝突したといふ事も思はない。今は只二人だ、此廣い家の内には、誰も居らぬ。滅多に無い事だ、皆が歸らぬまでに本心を打明けやう、身上を打明けやう、我身上の不幸な事を聴かしたなら、屹度彼の大瀧生のやうに同情を表して呉れるに相違ない、然うしたら、更に歩を進めて、何も爲すに暮らすだけの財産があるのだから、それで芝居ばかり見て世の中を送る、其人の、妻になる氣は無いかと聽いて見やう。屹度喜んで承諾するに相違ない、然うだ、今だ言寄るのは此時だ。

「お時さん……………」

「何んです……………」

「私の身上を知つて居ますか」

突然も茲に至りて極まれりと言ひつべした。お時は呆れて返辭を仕ない。

「私のたよりない身上といふ事を知つて居ますか」

「おは、厭ですよ、田母橋さん、眞面目に爲つて……………」

「眞面目で話すのだから笑つちやいけない。私は一生懸命だ」

「まアそんな事仰有らないで、ちツと御切りなさいよ」

「餅も切るが、私の話も聽いて被下い……………」

と言ひながら、おぼつかなくものし餅を切出した、切りながら、そして言ふ。

「知らぬのなら私は話すか……………ねエ、お時さん……………私の身上は……………」
それから少時の間、身上話を語出した。あはれなる自分の歴史を、充分に語り得たつもりで、これならば彼の大瀧生の心を動かした如くに、お

時をも亦同情の涙に沈めさしたらうと思つて、田母橋はお時の顔を見上げた。

お時は平気で、餅を切つて居て。

「然うですか、まア……」

格別驚きも仕なければ感じも仕なければ氣毒がりも仕ない様子。少しく氣が抜けたが、構はずと田母橋は説出した。

「といふやうな身上だが、財産は少々ある、一生涯芝居を見て暮らす位はある。如何だね、お時さん、私はお願ひだ……お願ひがある……實に真底から私は願ふのだ、私を不憫だと思つたら……私の願ひをかなへて被下い」

「何んだか妾には、ちつとも分りませぬわ、何の御願ひです」

「それア言ひ悪ひから……今夜泊りに来て被下い、其時に話すから」

「厭ですよ、誰が泊りに行くもんですか」

「でも、先き、泊りに行くと言つて……」

「それア串戯ですよ」

「ぢや泊りに来て呉れないの」

「厭ですよ、田母橋さん、其んな事が出来るものですか」

「えッ、如何しても……」

目的が脱れて田母橋は驚いた。

此圖を脱さずお時は大きな聲で。

「まア何んですね、其餅の切方は……そんなに大きかつたり小さかつたり、不揃では因りますね。本統に貴郎は不器用ですね。最う御頼み申しませんよ」

と呵るやうに言つた、でも未だ田母橋は機を見て退くといふ事を知らな

50 『ぢや泊りに来ないのなら好いさ、私は今此所と言ふよ』

『何んですか、言つて御覽なさい』

『言ふよ……』

不意と立上つて、四邊を見廻して、そして耳を澄まして誰か歸つて來は爲ぬかと様子伺ふた。けれど外には人の足音無く、唯千葉名物の寒風が、砂を兩戸に打付ける音ばかり。

田母橋は立つたついでに、お時の後へ廻はりて、脊から抱くやうにして、耳へ口を宛てて。

『後生だから夫婦に爲つて……』
お時は大喝一聲。

『何んですね、田母橋さん、奥様に言ツつけますよ』
言ひ様、正銘の脇鐵砲、田母橋は後の餅苳の上へ轉がつた。

これで初めて我に復つて、嗚呼、このお時。日頃から何んでも細君に密告する悪むべきおしやべりで有つた。空想に描いて見て居たお時は、お

しやべりでは無かつたが、實際のは油断の出来るのでは無かつた。忘れて居た、混じて居た、これは如何したら好からう。日頃の失策とは譯が違つて、これは實に大變な失策だ。これを彼の微笑ども爲ぬ生真面目な細君に言告げられやうものなら、實に如何も面目次第も無いのだ。穴へでも入りたい程耻かしいのだ。それが又彼の嚴格な主人に知れやうものなら、どんなに叱られるか知れない、殆ど我は消えて飛んで仕まうまで叱つて叱つて叱付けられた揚句に、此所を追出されて仕まふに相違ないのだ、然うすれば原庭さんも、最う構ふては呉れまい。大瀧さんも酷く叱る事であらうなど、考へれば考へる程、慚愧後悔の情に對えぬ。うからくど歩いて居てあまりに道を進過ぎて、川淀へ落込んだやうな心持に爲つて、酷く恐れ縮つて仕まつた。

然うかと言つて、此儘引下つて仕まつては、益々不可だ。

これは一層思切つた事を實行して、否應なしに夫婦となる事を承諾さし

て、それで今夜の大罪を掻消して仕まふにあらすんば、他に好き平和の手段は得られぬのだ。今のは串戯であるから、内所にして、奥さんへは言はないで置いて呉れと言つたつて、それを喋舌らずに居るお時では無い、残らず話して仕まふのが眼に見えて居る。其時の細君の可厭顔と、主人の苦々しい顔とが、最う眼の前にちらくとして居る。これは如何しても思切つた事を實行しなければならぬと、片手に出刃を
 持つて、片手にお時の袖を取つて。

「如何しても私の女房に爲つては呉れないの……」
 眼は釣上つて居る、今の先さまでの溶けるやうなのでは無い。眉毛と眉毛との間が狭くなつて、例の立一文字の筋が現はれて、鬼氣が人に迫るやうな。

「そんな事を……妾は奥様に言告げますよ」

お時はあまりに田母橋の面相が變つて居るので、恐ろしくつてく成ら

ないので斯う叫んだ。

叫んだ言葉の内の「奥様に言告げますよ」が恐ろしさに、出刃を閃かして脅迫して居るのに、それを又繰返したから、片一方は益々激して。

「これはどままでに頼むのに、奥様に言付けるなんて。失敬だ、失敬だ。斯うなれア最う決心した、私の言ふ事を聴かないと、殺すよ」

「何んですね、田母橋さん、こゝろす、なんて、そゝんな事言つて、妾、奥様に然う申しますよ」

「殺す、殺す……から……其つもりで……それよりか……今夜、私の、言ふ事を聴いて……夫、夫、夫婦に……」

「厭ですよ、田、田、田母橋、さん……殺すなんて、貴郎、人、人、人殺した」

「殺したか、無い。殺すと、言つて、殺すと、言つて……言ふ事さへ、聴さや、殺しや、仕、仕、仕、仕ない」

「ほんとに、酷い、貴郎、刃物、なんぞ、持つて、人を、おどかして、

人に、夫婦の、かためをしろつて、無理、無理だ、無理です」

「無理だった、殺すと言つたのは、悪かつた、が、奥さんに、言告げる

と、言つたから……言告げられちや、大、大變だから……」

「言ひます、言ひますとも、人を強姦仕やうと仕たのですもの、言ひま

すとも……言ひますとも……」

「強姦……人聴きが悪い、強姦と思つてるのは、誤解だ。全く誤解だ、

そ、そんな事を奥様に言つては、いよく因る、誤解だ……」

「いえ、いえ、人を、強姦……」

「けしからん！」

「酷い人だ」

「けしからん！」

「畜生だ」

「何ッ……」

「妾は口惜しいッ」

と泣出した、泣くにも息を切つて居る。田母橋も息を切つて居る。二人

共呼吸が逼つて、今にも倒れさうだ。田母橋も亦泣出して。

「此方の真情も知らないで……酷い事を言つて……今度は最う本統

に殺すぞ」

「殺すなら殺して御覽なさい。妾だつてたいは殺されなう」

「何をくそッ！」

と言ひながら、出刃庖刀を振上げた。お時も菜切庖刀を逆手に持つた。

「何くそッ！」

「たい殺されるものか」

「何くそッ！」

「さア御殺しなう」

最うどちらも正氣ではない。眼は釣上つて血走り、唇は裂けるまで嚙締
められ、よろ／＼と手足の定まらぬ。

『あれッ……………』

と叫んだはお時の聲、忽ち鮮血は餅莖を染めた。

又續いてお時が第二の叫聲！

直ぐ又其第三の叫聲！

おはれ、肌の白さも、餅の白さも、悉く紅に染まつて仕まつて、黒髪

は俎の上に散亂なし、莖までが撈つたやうに千切れて仕まつた。

田母橋は茫然として立つて居る、これも血泥に塗れながら、片手に出刃

庖丁を持つた儘で。

逃走するでもなく、自訴するでもなく、又自殺するでもなく、全く何と

いふ事無しに、立つて居る、此所へ。寒川新田の殺人の現場を見て歸つ

て来た三田浦検事。留守の間の意外の大珍事に、吃驚して、頓に言葉も

出ない。今臨檢に行つて来たばかりの検事の宅に、同僚の検事の出張

を乞はねばならぬ騒動。警察署へ萬吉を走らした跡で、加害者を取捕へ

て、滅茶々に撲つて、荒縄で縛つて柱へ繋いで置く前に、先づ被害者

を搔起して、水やら、薬くら、介抱に手を盡したが、乳の下の一突が致

死の原因か。素より息を吹返へすべうも見えぬ。検事が嚴格なる顔に溢

る、ばかり涙を流して、聲を出して慟哭せぬばかり。

三田浦検事は、お時の葬式を親に代つて費用を辨じ、如何にも立派にし
て出したけれど、田母橋に對しては別に辯護士を選ひでもなく、大瀧生

が望出でた儘に、一任して顧みない。

お時が手に菜切庖丁を持つて居るのと、傷は皆前面に有るのと、田母橋

も二三ッ所微傷を受けて居るので、これを正統防禦なりと辯護するか。

或は加害者は狂人なりと主張するであらうか。大瀧辯護士の腕前如何は、

此時に分るのである。丁年未滿の殺人犯、田母橋はいづれにしても一命は助からうが、ながらへるのが田母橋には、却つて一通りならぬ苦痛であらう。大瀧辯護士が熱心に無罪の判決を受けさせやうと盡力しても、加害者自からの身になつたら、寧ろ死刑の宣告を願ふて居るであらう。

（をばり）

大競走

大競走！房州半島を一周して早く出立線に着きたらむ者を勝利と爲す。選抜競走者は西部運動會の藤原平太郎と、東部の立花源次郎則ち余なり。最初此任に當りたるは田村録雄なりしも、彼は踵を痛めて立つ事能はず。故に余は是を次ぎぬ。其候補として名乗り出るや、會員の多數は言ひぬ。立花は不可なり、何となれば安房は其郷里にして、家は線路に沿ふてゐるを、不知顔して過行かむ事恐らくは難かるべし。しかず彼地に關係のなき者を出さむにはと、嗚呼余はさる情に引かれて大事を過まるべき男子ならず。奮然として説破りぬ、其言に曰く。勝たば好からずや。泰西に七日競走なる物あり。今度の競走は之を換骨したるなり。先づ本陣を安房の西北隅たる本郷保田村の滑川の橋上と定め。一人は海岸に沿ふて加知山の方へ走り、一人は内部に進みて佐久間村の方へ駆ける、斯

くして海岸を何處までも傳ひ、甲乙同様の道筋を走り、早く河南より進みたる者は河北より歸來り、山路より行きたる者は海岸より戻ると言ふ順序、其道程を記せば、保田より加知山まで三十二町、加知山より那古へ二里十八町、此間木の根峠の隧道あり。那古の觀世音より館山まで一里十五町、柏崎、鹽見の松を過ぎて波佐間村光明寺に至る一里二十町、それより洲崎まで一里の石坂路、明神の社、役の行者窟、小沼村までは三十餘町。これより海端の沙漠二里二十六町を過ぐれば、布良村、布良崎に出づ。又行く一里三十四町にして白濱の燈臺、辨天の社に至り、乙濱までは一里。川口まで一里十六町。朝夷まで二十町。次ぎて和田までは三里十一町。江見までは一里十三町。江見より波太まで一里。波太より前原まで三十二町。これより十一里餘にして保田村に歸る。踏去りたる道筋の神社佛閣には必ず名勅を張付けて、以て大いなる拔路のなからしめ。車馬に乘るを防ぐために一錢だも持つをゆるさず。但し食事と休

息とに就きては種々苦慮を廻らしたる末、布良と江見と金東との三箇所、是河南より進みたる者の爲めに。前原、白濱、加知山、是河北より進みたる者の爲めに、兩部より各一人宛の管理者を出し、則ち一箇所二人の番兵を置き、競走者の此所に着きたる時より數へて三十分の間に食事を終らしめ。夫より一分たりとも早くは出立を許さず。又兩部より一切路傍に人を派して妨害又は加勢を爲さざめず、自由に獨行をせしむるとの計畫なり。右の方法は完全なる物にあらずと雖も、此他に良法あるを見出さず。洋人は金錢を賭して競走なす故、其間往々卑劣なる手段を凝らすとわれど、我等は名譽を懸けての争ひなり。人目の關のあらずとて、規約を破るが如き事を爲さざるなり。敵の藤原とて正かに這般の不徳は爲さざるべし。

此度の競走は存外江湖の注意をひきて日本全國の新聞に雑誌に事々しく書立てぬ。某少年雑誌には二人の肖像を出したり。

此勝負の如何にては余一人の褒貶は兎も角も、代表せる處の運動會全体に取りて非常の名譽不名譽を來すなれば、余の任の重き事言ふまでもなし。

去年相摸の三浦半島を廻りし時は、我會の菅が彼の會の大江に負けたり。過日八百八十ヤードの競走にも負たり。斯く失敗のみつゞきては胸悶のメダルの光輝を失ひ、高手帽子を頭より取られて、普通の彌次馬と同一視されむ。如何に残念なる事ならずや。

此秋大學の來賓競走に出で、余は藤原等と共に走りたる事あり。其時彼の呼吸と彼の足取とを窺ひて知り居るが、決して侮るべからざる敵なり。彼は誠に恐るべき快走者にして、西部の會の第一位たるや、宜なり。余は東部にての第二流、其一流たる田村は過ぎつる高等中學の競走場にて、彼の藤原に突飛ばされ、轉びたる途端に其踵を挫きしなり。余は正しく其復讐に出でたり。

余の又もや彼に劣りたらむには、何の面目ありて再び運動場裏に出でらるべき。星の夕、九段の馬場。霜の朝、不忍の池邊。卵を飲み、絹を合み、走りならせし甲斐もなく、彼に遅れて歸りたらむには、何おめくと又顔出のなるべき。立花源次郎の決心は既に定まりぬ。

此大競走は後期の試験濟みて冬期休暇の間に起りたる事。數多の會員に見送られて高橋端より瀛船に乗り、立合の一行三十餘人、安房の保田村に着きたるは、十二月の二十八日。二十九日は要處々々へ管理者出立し。三十日は英氣は養ふ爲めに一室に籠りて出る事なし。此間の心中如何、歴然として眼底に行路を現じ、空想百出、靜坐する事を得ず。幾度か立ちて室内を散歩し、兩脚を撫して時には叱呼す。附添ひたる會員は同じく狂せり。人の顔さへ見れば、負けるな〜と言ふ。酒を禁じ、滋養物を食ひたる結果はいま〜あらはれぬ。櫪に躍る荒馬とや言ふべし。既に今宵一夜を越ゆれば、世間は大海日、我等には出立日なり。憶年も

行くべし。我等も行くべし。此晩肴に鯛を食ふ、かゝる時には御幣も擔ぐ物なり。扱て誰しも覺えはある事ならむ。いよく明日と言ふ今宵の如何にしても眠られぬ事。眠れば直ぐに夢を見る事。其夢は必ず翌日行ふべき事の結果にして、又其結果は必ず悪しき事なり。附添の誰彼も皆同様なりしと其朝語りぬ。

来れり、十二月三十一日の朝——出立すべき時。旅宿より出て本陣と定められたる滑川の橋上に行けば、其所には立合人、號令者、東西兩部の會員等、藤原平太郎も既にあり。彼も我も一様の服装、白きフランチルに黒き端を取りたる競走着、競走靴、競走帽。彼は赤にして余は白なり。バンドを堅く締め、ボタンを注意し、持つべき物は亞刺亞ゴムの引きたる名刺と、ハンケチーと、時計と、鉛筆と、寶丹と、これのみなり。立合人は兩人の身体を驗査なしぬ。彼は尤も名譽なるメダルを撰みて其數六個を胸に懸けぬ、余も同じきを

五個、此勝負に勝たば余は六個となり、又彼勝たば七個とならむ。

時は午前五時三十分、六時の出立には未だ三十分の間あり。橋の中央にて余と藤原とは水の盃を取交しぬ。漁村の男女何事にやと行手の方に立ふさがるを、立合人は避けしめたり。其内おくれながら、わざ／＼此結果を見にと來りたる通信員新聞記者好事家殆んど集りぬ。最早や十分。既に五分。迹三分。次第々にせまりぬ。

立合人は余と藤原との手と手を取りて繋がしめ、互ひに握手せしめたり。迹一分。輕便筒に仕込みたる狼烟の口火は着けられたり。余と彼の手は誰よりと言ふ事なく震ひぬ。號令者は旗を手にして時計の針のみ睨みたり。東西兩部會員は早や絶叫せり。負けるな、負けるな、勝て、勝て勝て!!!

嗚呼さりながら、いづれか知らず負けるなり。再度此橋を踏む時は、勝ちて胴上にせらるゝが、負けて水中に投せらるゝか、此二つは遁れざる

なり。

アー、ユウ、レデイ——連れて五休は動きぬ。

アー、ユウ、レデイ——早や足は進みぬ。

アー、ユウ、レデイ——不知此時を。

ゴオン！旗は上りぬ。山に鳴り海に響きたる狼烟の音、聴えざりし。拍手喝采、これも聴えざりし。余は帽子を振舞はしつ、一散に走り出して

加知山の方に向ひたり。

含みたる梅干は五六町にして吐出しぬ。海岸を傳ひて只管に走り、いつ

しか三十二町を踏去つて加知山に着きたり。時計を出して見るに六時十

七分、斯く急歩しては先きに行きて疲勞せむと、心を静めて道傍の寺院、

日蓮宗の光華寺と言ふに至り、其本堂の柱に名刺を張らむとし、裏のゴ

ムに舌を添ふれども喉渴したる爲め濕はず。止むなく水を付けて漸く張

り得たり。行く先々も斯くの如き有様にては失敗する事必然なりと、胸

の上に両手を加へ、一定の足並にて加知山を發しぬ。行く人、來る人、

皆余の走るを見て不思議さうなる顔を爲しぬ。

口に含みたる物を捨てたる爲め、呼吸を量るに不便なる故、路傍の草を

取りて嚙へつゝ走りぬ。走りながら思へらく、此四年間大學運動會にて

最も速く走りたる者の成績を見るに。

百ヤード (五十間) 十秒、八

二百二十ヤード (一町五十間) 二十八秒

四百四十ヤード (三町四十間) 六十三秒、二

八百八十ヤード (七町二十間) 二分二十六秒

右の割合にて計る時は長程は短距離より遅くして、一里不足を十七分か
かりたる事決してあやしむに足らず。歩行にても一時間には一里半を行
けるなれば、疾歩して三里半を一時間に通す事仔細なし。それを又一時間
三里として、長程を疲勞せざる様注意せば可ならむ。斯くして行く時は

布良の休息所には十一時前に着きて、書米飯には餘程早し。只恐る不意の障害の起らむ事を。

此考へ未だ終らざるに第一の小障害に逢ひぬ、いつしか來りたる木の根の峠の坂路、先日の大雨にて泥濘登る可らず、諸所に破損せる處ありて誠に難澁千万。同じく敵の藤原も此坂を通るなれど、登る者と降る者との差はあり。非常手段を以て進まざれば此爲めに遅るべしと、ありたけの勇氣を出して駈上れば、心臓の鼓動劇しくなり、脈搏又急調。されども余の肺量に實に四百二十リートルにして、通常の人よりは百餘リートル多し。故に左程疲勞を感じずして其難道を切抜けたり。やれ嬉しやと一息すれば、其所に山腹を操拔きたる隧道ありて、其中は闇々黒々行く人皆松火を持ちぬ。余は實に松火を買ふの錢を持たず、又火を點じて携へるまでの時間を有せず。入口の茶屋にて呼留むるをも聽かず、進行するに、窟門の正面に立札あるを認めたり。

『隧道内破損して時々岩石落下す、注意して往來せよ。』

余が走る響は洞中に鳴渡りぬ。其都度に若しや岩片の落來らむかと、自然に首も縮まるなり。扱て竿に打たれ、溜に飛込み、迷ひ迷ひて暗黒の世界を辿り、漸く盡きて日光を認めたる刹那、一足迹に轟然たる響起り小桶程の岩轉がりぬ。危し。

隧道を出れば降坂なり。注意して呼吸を養ひつゝ降り、此所に谷川を右に左に幾多の村を過ぎて那古の觀音堂に着きたりける。豫定より早き事三分、今は七時零七分なり。十分になるまで休息せむと石段に腰を掛け、眼下の景色を眺望するに、實にや鏡ヶ浦の名に反かず、入灣廣く平かにして白鷗眠る長汀に、砂は白く、松は緑、北條館山は幽にして、沖の島、高の島、風吹かば走りもやせむ風情。慾には此所にて一日を過したし。景を見、時計を見、其針に促がされて名残は盡さぬ那古寺を出立し、石階を下りて街道に出れば、其所に二人挽の車一臺、車夫二人、向

鉢巻にて扣へたり。傍に又一人商人体の男立ち居りしが、小走ながら寄
 来りて馴々しく余に向ひ、如何に立花様嘸かしつかれ給ひつらひ、誰
 も知る者あらざるを、此車に乗り給へと言ふ。余は知らぬ人なれば之に
 答へず、好しや如何なる知人なりとて足を留むべき場合ならねば、構は
 ず走行く後より、彼車も商人も又走りながら従来り。如何にしても
 乗り給はぬかと言ふ。不思議なる奴等かな、何者ぞ、何故に余を乗らし
 めむとするにや。疑念高まりて余は彼に問ひぬ。君達は何の縁故ありて
 斯く勧むるにや。其御不審は御道理何をか隠し申すべき。我等は貴郎
 方の競走に大金と賭したる者の間者なり。何卒我等を助くと思ひて、
 密かに此車に乗り北條の入口まで行き給はれど。余は大に怒り、叱し
 ぬ。咄、汝等は大金を賭くるか。我は名譽を懸けぬ、さる卑劣なる手
 段に乗る者かはと大聲、跡をも見ずして暫時韋駄天!!!
 嗚呼既に斯くの如し、前途に如何なる障害のあるか知れずと、大いに心

を勞しつゝ、鶴谷八幡の境内に入り、額堂に彼の名刺を張りぬ。それよ
 り又松原を走り、北條の町は通らずして直ちに館山へと進みけるが、此
 入口には新聞にて知りたる我等の競走、そを見むとて大勢待構へぬ。余
 の姿を見るや黒山の如き人は忽ちに白き浪の如く成りぬ。これは帽又は
 ハンカチーフを振るなり。小學校の生徒は唱歌を謡ひぬ。余は此一連に
 禮して、館山の公園地たる眺望臺の高地に至りぬ。其所にも見物は群集
 せり。金刀比羅の神社ありたる故、其所の社壇に行きて名刺を張らむと
 するに。名譽なる競走者の名刺を與へられよとて、其うるさく集まる事
 糖塊につどふ蟻の如し。限りある物を限りなき人には與ふべからず。こ
 れを諾せずして行かむとするに、這は抑も今張りたる名刺を剝がむとす
 る者ありけり。斯くてはならじと躊躇せしが、一策を案出して神前の賽
 錢函に名刺一葉投入せり。此上は張りたるを取られたりとして、此所に來
 りたる證據は留まるべしと、群集の罵言と喝采を半々に聴き、館山を出

立しぬ。那古と言ひ今又此所にての小波瀾にて、十分は慥かに失ひたり。これを取かへさざる可らず、藤原は今何處邊を走るらむと、心少しく考へに沈みて、足の運び亂れぬ。

館山を去れば又余の何物たる事を知る者なし。何事か、何者かと言ふ評の路傍の人の口の上りて、子供は笑ひ、犬は吠えぬ。

柏崎、宮城、笠名、大賀の諸村を過ぎ、鹽見村の臥龍松、其所の辻堂に記念を留め。又走りて濱田村に至り、岐路を過ぎざりし表の爲めに、其

距離鹽見村と近きにも係らず、鉦切神社の柱に糊着せしめ。見物村より波佐間村に至り、光明寺の門扉に同じく張りぬ。

時計を見れば八時四十分なり。豫定は八時十分に着くべきを、斯く三分も遅れたるは二度の挫折ありしとは雖も、少しく勇氣の衰へたるに相違なし。斯くては成らじと奮然寺門を去り、坂田村より崎嶇たる岩道、

上りつ下りつ爲す程に、房州第一の壯麗たる洲の崎の一角にぞ着きたり

ける。

海を隔ちて伊豆相模を見渡し。雲か、島は雲間にあり。島か、雲は島の後、噴火の烟か白く見ゆるはこれなむ伊豆の大島なり。坂東三十三番の

札所より、役の行者の岩窟を過ぎ、山續きの洲崎明神に至る。此社は頼朝の眞鶴崎より着きて禮拜したる處なるよし。例に従ひて彼の事を終り、

長さ石段を降りて伊戸村の海岸を過行く時しも、突然、立花君と呼ぶ者あり。

障害！又彼の山師輩が乗車を勧むるにはあらざるかと、見向きもせずして走行くに。立花君しつかり遣るべし、負ける勿れ、負ける勿れ、君

の勝利を祈ると言ふ。其聲は覺えあり。願ればこれを竹馬の友人、寺澤

富吉と言ふ學生にして、彼は植物學に熱心なり。又有名なる滑稽家なりの寺澤は肥滿の大兵、其上採集函に植物を充滿せしめたるを肩より懸けてあるなれば、余の急足に従ふて走るは中々に難き事なり。ヤツ寺澤君

かど、立留らむとするに、手を振りて制しつ。走り給へ走り給へ、走りながら語るべしとて、ブリキ製の函をペホ〜言はせながら、汗水たらして苦し氣に駈ける。余も亦駈ながら。君は植物を採集の爲めに來給ひしか。然り此冬期休暇を幸ひにして來たれり。又其君の競走を見むとて。珍しき植物ありしか。有り有り、大いに有り。その名を勝利の草と言ふ。立花の勝利の草、負るなく。大丈夫！否油断は大敵なり。此前に砂漠あり、亞刺比亞の砂漠も斯くやらむ。駱駝と思ふて弱り給ふな。君、駄洒落を言ひ給ふな。君に今笑はされては進む事能はず。さらば言ふまじ。然ども彼の藤原の來らむには、彼奴を絶倒せしめて大いに妨害を加へ呉れむ。それも不可なり決して仕給ふな。正統に走り正統に勝つ我なれば。正統に走りて正統に負給ふな。疾く行けッ疾く走れッ。君の言葉程君の足は進まず見えぬ。嗚呼實に僕は呼吸切頻りなり最早や従ふて行く可らず。僅か一町半餘にして是なり、

君の健足、長程の競走、此先も氣を注げ給へ。忝けなし。行給へ、これにて別れむ。さらば。さらば。……さりながら、今少しく行む。これにて澤山なり。君を送る須く千里行べし。今少しく従ひ行かむ。其好意謝するに言葉なけれど、君の苦し氣なる呼吸とブリキの音するを聞きながら走りては……。邪魔になるか。然り。されば別れなむか。君さらば。さらば、君。無事に寒風を突切り給へ。恙かなく枯野にさまよひ給へ。さらば。さらば。其聲は遠く幽けし、ブリキの音は留りぬ。さるに又後に當りて函の響きはあらぬとも、呼ぶ聲近く高くするなり。見返せば又彼の寺澤、今度は採集函投捨て、手に草を捧げたり。この福壽草を君に贈る、僕の同行せると思ひて携へ給へ。これを受取る時に握手の禮を爲しぬ。余はポケットに押入れて又走りぬ。此寺澤に會したるより勇氣は益々加はりたり。彼が勝利々々と言ふ聲を聴流して、進んで小沼村に至り、是より平

砂浦二里二十六町の砂原を布良崎まで突切らむとす。時や悪し、向風の劇しく砂を捲き來り眼も明けられぬ有様なり。ちえツ是敷にと蹴ッて行くに、足を埋むる事雪の如し。一步を進めば、一步歸り。一步抜けば、一步を没す。其歩行に困難なる事非常なり。浪は荒く、山は凄く、浪も砂なれば、山も砂なり。人も砂にまびれて五町、六町、自然時間を費す事豫想外にて、又足を痛むる事一方ならず。心の急きて頭のみ先きに向ひぬ。靴にては却つて歩みがたければ、脱ぎて跣足になりぬ。嗚呼之を第一の失策と爲す。漸く進みて其中央に至りたる處、四面いづれを見ても砂原、人一人見えざる處にて、貝の切にて右足の裏を破り、鮮血淋漓、白砂を染め、又如何とも爲す可からず。行くに行かれず歸るに歸られず、惘然自失只直立すれば、風益々吹荒みて旋風四方に起り、幾度が帽子を取られむとし、渦舞ふ中心に巻込れぬ。

過ぎつる歳の大洪水に紀州深山の絶壁を打崩し、數百年も立ちたる大木

を根の儘に押流し、それが海に漂ひて何百里の海上をゆられ、ゆられ、此房州の海岸に吹付けられたりとは其頃の新聞の報する處。見れば其木ならむ、三抱もあるべき大樹の、ざれて擦木の如くなりたる物幾株となり横りて、砂に埋るゝあり、埋れざるあり。漁夫に切られて根のみ遺るあり。余は止むなく之に腰掛け、ハンカチーフを破りて足を縛りぬ。

只時の空しく過ぐるを恐れて痛き事は感せざりけり。十一時前には布良の休憩所に着くべかりしを、未だ一里餘の道を残して、今は既に十一時を過ぐる五分なり。

切齒するを寒風の故と言ふ勿れ、毛髮逆立ちて遙かに布良崎を望む――

残念。男兒倒れても尙止むべきやは、猛然として立上り “Excelsior” と叫んで駈出したたり。俄然又渦卷の砂は來りぬ。何んの又と “Press on” と呼はつて進みたり。

爰に三つの小流を飛び越え、砂路盡くる處巴川を徒渡りして、疵口に

砂と水とを入れぬ。十二時二十一分布良崎の休憩所として設けられたる某旅亭の椽側に倒れ着きて、初じめて痛所と疲勞と空腹とを感じぬ。管理者は敵も味方も隔てあらで、東部の一人は言ふも更なり、西部の一人も奔走なし呉れ、大いに好き結果を得たり。此二人の顔を見たる時は其嬉しさ地獄にて佛の譬の如し。素より此漁村にはなき佳肴、管理者が留意したる晝餐はオートミルにハム子エツクスにマチラヒータス。此他スープに鶏卵は望む儘にそなはりぬ。さりながら『好く走る者は又能く食を節す』と言ふ格言は余の常に守る處、十分の間に程好く食し、迹二十分の休息時間に醫を呼びて疵の手當をほどこしぬ。綱帯を終ると同時に余は走らざる可らず。管理者は頻りに留めて、延ばしたる時間は不意の出來事の爲めなる事を余等證明するどて、親切に言ひ呉れたれども、此度の競走には、不意の出來事の爲めに遅くる、事の總べてを籠めての計算なり。之に屈すれば則ち余の

負となるなり。十分、二十分延したりとて、何程の事あるべきやは。途中にて弱るとも、それ——ゆきゆきて倒伏すとも萩の原——此句余が心に協へり。さらばとて休憩所を立上れば、行き給ふかどて東部の一人、さもきづかはし氣に言葉を放つ。敵方なる西部の一人も、注意して行給へと言ふ。醫者も亦慰めて、無理ばし仕給ふなど言ひ呉れたり。外に出れば此所は又館山と同じく、余の競走者たる事を人々知りて、群集する事非常なり。此人々の前にて跛者の失体を示すべきにあらずと、思切つて踏切り、踏次ぐ、足の裏に五寸釘を打付けらるゝ如く、痛き響きの頂天にまでこたふれど、何ッ。齒を喰絞りて走りぬ。迹より驛はすれまで管理者二人送來りぬ。彼等はこれにて役目を済したれば、近路を直行して我より先きに保田へ歸るなり。余は之に言を托して曰く。立花源次郎は足を挫きたれど勇氣は依然たり。東部會員の耻辱となるべき事決して爲すまじ。

斯くて余は海岸の岩道を、貝殻にて破りたる足裏に踏みつゝ、根本、瀧口の諸村を過ぎ、長尾川の石橋を渡り、白濱に着きぬ。辨天の社に名刺を張り、時計を出して其針を見れば、午後二時五分なり。これまでは通常平均十分に十八町を歩みしに、痛所の出来しより十分に十町五十間餘と減じぬ。此時の余が苦痛は豈足部にのみ留らむや。白濱には藤原の爲めに設けられたる休息所あり、其所には布良と同じく他の管理者のあるべきなれど、素よりそれを訪ふべきにあらず。突起疾風の勢にて漁村を過行くに、いつしか街道を失して濱邊の網干場に出でたり。此網は沖に引くねこそぎ網、又は地引網等にして、高さよりは寧ろ長さ物なり。短きも十間、二十間、左なきは二十五六間、恰も垣の如く濱邊を横切り、幾重連りて双六の目の如し。此間を曲折して過ぎむには、二三町の處も三四里となり、時を費す事又多し。余は大いに苦しみて、此八門遁甲の陣立を切抜けむと思ひしかど、いづれへ行きても細は

張りあり、來りたる道すら失して、八幡の藪に迷ふが如し。漁童に問へば、何處に行きても行かれると言ふ。余は只行過ぎむと言ふにあらず、速に此所を過ぎむとの意なり。突抜ける近道は無きかと言ふに、そは無しと言ふ。今は是れまでと覺悟して、高からぬ干網の上を高飛の技藝をあらはして飛越しながら走りぬ。さるに如何にせむ數限りもなき事なり、殊に長途を歩み又疵を受けたる足の忽ちに疲勞なして、五尺二寸の線上に微動さへ興えずして飛越えたる余の、これは又如何に三尺不足の網の上、幾度か足の懸りて、干したるを落し、竿を折り、網を破りたるも二つ三つ、大いに驚きて狼狽せる處へ。此野郎、待てツと大喝なしてあらはれ來る五六人の漁師共、手に手に權なと携へて、余を捕へむとしめさける。

之に追付かれては一大事、競争の次第を語りても、分るべき奴等でなし。彼此なして暇を費さば、明かに失敗して、勝負に不利なる事眼前。只走

稚き時に登りたる、吾家の庭の柿木は、枝さびしくぞ早や見えぬ。家の横手の牧場には、乗馴したる栗鹿毛の、余を忘れぬか此方に向き、一聲高く嘶きぬ。

門に一人餘念なく、紙鳶を揚げひと爲し居るは、正しく弟の健人なり。やッ兄様……と呼掛くるに、慈言葉は言はぬにしかず。通せと一句呼捨て、行かひと爲せば頑是なく。好く歸つて來ませしと縋らひとする、心にもなき一喝に。えッ邪魔すなど、行きかゝる、足には紙鳶の糸は抑も、これぞ血筋の切りがたき、縁につなぐ神のわざ。

皆出ませ、兄様が……と手柄顔なる健人の言葉、聽付けて先駆出しは、妹のお光を背負ひたる縁家の娘お政なり。扱ては此頃家に来てか、いつの間やら島田に結ひて少時見ぬ間の美しさ―思はず止まる余の足の、糸を弟は取去りつゝ。此紙鳶よりも大きなるを、何故東京より買て來て土産には被下ぬよ。堅く約しておきたる物をと、腕に絶りて離るゝ事なり。

し。仔細はいづれ後にて知れる。さらばと帽子に手を掛けて、健人をはらひ、行かけるを、お政は背のお光をして。兄様待つてと呼留めしめたり。

留りたきは山々なれど、浪に碎きて駈出す、後に又も人の聲は、父か、母か、祖母様か。祖母なりせば余の姿の、如何なりしか見えざりしならむ。曇り勝なる老の眼に……。

洲ノ崎の岩道より、平砂の砂原より、吾家の前の平地を過ぐるが、誠に苦しき難場なりし。それより朝夷の町を一散に走り、住吉寺に張札し、川尻川より牧田村、瀬戸川を渡りて川合村にかゝりたる向ふより、競走者一人藤原平太郎、此方へこそは走來りぬ。

兩競走者、此所にて會しぬ。これまでの所にては、いづれか早く進みたると云ふ此豫算忽ち心頭に浮びぬ。されども如何にせん明細なる地圖を持つにあらず、僅かに記憶を喚起して、大雜端に計るなれば、委しき

事は得ざりしかど、余の腦裏にては残念なるかな、十四五町、彼に遅れ

てあるやにおぼえぬ。ばつたり兩方より突當りて、直ちに帽を取り、手を握りぬ。君の方速かりし。否、余の方遅し、異條なきか。變事なし。立花君の健康を祝す。藤原君萬歳。競走萬歳!!!

斯くなれば、敵も味方もなくなる物なり。彼より余に言へらく。君、一歩も下るなかれ、僕も亦一歩も進まず。此儘に横行して此路傍に憩はずや左なり君も進行を留め、余も同じくすれば、何時間休むとも可なり。

二人は路傍の枯草の上に倒れぬ。時計を出して兩方合せ見れば、恰好午後三時三十五分なり。彼も我も健足なればこそ(疲勞せざるにあらぬを)今朝滑川の橋上に手を分ち、今又川合村にて逢はれたるなれ。されば此寒空にフランネルの薄着も汗多く鈍染たり。共に脱ぎて五體を拭きぬ。

此間互ひに途次の難儀を語りて、注意を加へつ。加へられつ、其親密に語りし事は、或は人の豫想外なるべし。

三時五十分を期して、二人同じく立上りぬ。今までの親友は忽ちに仇敵なり。一、二、三!!! 右と左に分れて急走。

丸山川。温石川。三原川。和田の宿に着き、此所の稻荷社に標を付けむとして、用意の名刺を搜れども、如何に仕けむ——無し。途中にて落せしか。或は休みたる處に忘れしか。汗を拭く時に脱ぎたるか……それよ、其時藤原の、塵ありとて拂ひ呉れしが、萬一、萬々一、彼に悪計はあらざりしか。人を疑ふべきならぬと……彼の馴々しかりしは薄氣味悪かり。

されども今更躊躇すべきにあらざと、鉛筆を以て柱に書し、漸く事を便じたり。此爲めに時を過す事大いなる殞なり。六時二十七分に江見村の休息所に達しぬ。信切なる管理者の介抱と、時

に取りての珍膳に向ふ事、布良に同じ。此所にてマツチ一函とゴムの無
 き管理者の名刺とを得。兩脚には焼酎を吹き、口には梅干を含み、六時
 五十七分、彌夜中の遠足とは成りぬ。
 既に朝夷より和田、和田より此地まで、次第々々に遅くなりて、氣の張
 りも挫折なし、兩脚全く捧と化しぬ。闇に向ひて江見村を出る時のつ
 らさ！

波太まで一里、殆ど四十分かゝりぬ。波太より前原へ三十二町、これは
 少し早くして、着きたるは丁度八時なり。追分を左に是より海岸を辭
 して内地に向ふなり。一等道路の平地を眠りながら走り、加茂川に沿ふ
 て大里、坂東、押切、南小町、寺門、佐野、奈良林。夢の中に歩き、夢
 の裏に名刺を投入れ、石につまづきて倒れかゝり、はッと氣の付きて我
 に復り、マツチを擦りて時計を見るに、針は午後八時なり―訝し前原を
 出でたるが八時なりしに、それより六七里も歩きたりと思ふ今、同じ

八時とは訝し。

道理こそ、時計は留りて居るなり。こは如何にせむ、夜更くして人眼り
 ぬ。又好し人の起き居ればとて、山中時計のあるは稀なり。嗚呼時間も
 道程も全く知れずなりたり。迂濶爲すべき時にあらずと、疾風の如く闇
 を走りて、最後の休憩所たる金束村に至たる、時に午前三時二十分たる
 事管理者の時計にて知りたり。此まで二人は眠らずして待ちたる由。今
 は食を欲せず、眠れば可なり。三十分過ぎなば必ず起し給へとの言葉を
 遺して、靴も脱がず、帽子も取らず、椽側に轉びぬ。誰やらむ毛氈掛け
 たるをおぼえたるのみ、其暖さ、心地好さ、此他は誠に前後も知らざり
 けり。

呼起すを開流して今は競走も何も打忘れ、只其眠たき事限りなし。され
 ども底に沈みたる僅少の勇氣は、睡魔の中より驅出して、これより保田
 まで三里二十町。時計を見れば三時五十五分。五分寐過ぎたりと大周章

動かぬ足を無理に動かし、走れぬを無體に走り、無茶苦茶に走り、走り走りたる氣なれど實は牛の歩行より遅く、歩みつかれて、疲れて歩み、漸く保田の滑川、出立線に着きたるは、時維明治二十六年一月元旦午前第六時零秒。見渡す海原に初霞、富士白く、朝日影赤し。人々口々に、勝利、勝利、大勝利!!!。目出度、目出度、目出度、目出度!!!。而して余は大喝采、大拍手の中に胴上せられたり。其時隠袋よりばら〜と出るは、彼の福壽草、福壽草。

(をばり)

探檢實記

銅山子變災視察録

第一報 (明治三十二年九月一日尾ノ道濱吉樓にて認む)

八月二十八日に於ける東伊豫の暴風雨は、實に猛烈を極め、その別子銅山附近に與へたる慘害は、殆んど名状すべからざるものありとの報、三十一日の午後に至りて神戸新聞社に達するや、余は自ら進んで派遣の任に當り、其變災が及したる慘狀を視察せんとし、單身輕装して起てり。午後十一時四十分山鐵の急行列車は強雨を衝いて西行の動轉を始めぬ。車中の人、多くは別子銅山の異變に馳するもの。沿る場合には急行列車

も尚ほ進行の遅々なるを覺ゆるに、思ひがけなくも上郡驛にて、スタッフの行違より停車すること三十分間、時に雨漸く歇み、秋草の叢にすだく虫の音いと涼しく、断えては鳴き、鳴きては断ゆる裡に、旅の秘を味ひ、種々の感想は之より生じぬ。岡山を過ぐる時は天猶暗し。十年故郷に入らず、今鐵車の舊知の山河を過ぐれども、窓外霧深くして眼界に入るなく、轉々感慨に耐えず。一日午前六時十分尾ノ道に着。神戸にて簡單なる變報を聞きてすら、事の容易ならぬを想像せらるゝに、纔かに當地まで来て見れば、その感層一層に深し。开は東西より來る瀛車を下り、新居濱行の船便を求むるもの續續として、幾十百人なるを知らず。此上新居濱に着きたらんには如何なるべきか、更に別子銅山に赴きたらんには如何なるべきか。木津川丸は十二時の出港にて、今少し時刻を剩せるをもて、尾ノ道新報を土堂町に訪ふ。編輯員一人も在らず。何時も出勤は午後なりと聞き、新聞紙を一葉購ひつゝ、今回の災害に關する記

事もやと見れども、何の報道もなし。對岸の地にありて此の如し、川向ひの火災視するとは此の事よと覺えず失笑せり。

第二報 (九月一日木津川丸にて認む)

六千餘人は三千九百尺の高所なる別子銅山の山中に在りて、鐵道破壊し、橋梁流失し、爲に山麓に出るの途絶えたるより、餓死す可き憂慮の、崩落の大慘事に續きて起らんとするにはあらざるか。山上山下米麥の貯蓄所の設け無かりしにはあらざる可けれど、這是、土砂の爲に埋没したるか、濁水の爲に流盡したるか、其孰れかにあらずとせんや。見よ、住友の所有船木津川丸は、少からざる白米を、尾ノ道に於て積みつゝあるにあらざるや。加之副食物として漬物の大樽の數多くを共に又積みつゝあるにあらざるや。

我は船員の、米俵と漬物とのみ先きに積入れて、乗客を後にする結果、乗りはぐれる様なる事はあらざるかと、そののみ心を苦しめ居たりぬ。

されども幸ひにして、午後一時頃、漸く旅宿より本船に乘移る事を得たりき。

上等船客は、我と共に三人なり。一人は某鑛山に關係ある紳士。一人は住友家に縁故ある紳士、皆向ふ處は新居濱なり、憂ふる處は今回の大異變なり。

木津川丸は尾ノ道の港を抜錨したりき。今日は二百十日といふなるに、空の薄曇りたるのみにて、海上は頗る穩かなりき。

上甲板上の船室にて、三人談ずる處は、一語の他事に渡らざりし事を先づ記せざる可らず。しかも一回だも笑聲を漏したる事無くして、愁眉常に我等の顔を覆ひ居たるをも、併せて記せざる可らず。

讀者よ、我は諸君に別子銅山の惨事を視察して報道す可き任務を持つる者なるよ。我は出來得る限り、深く委しく今回の記事を綴らんと思へば、得らる、だけ多くの紹介状を持ち、各方面より材料を收めんとこそ

思ひつれ。未だ足跡新居濱を踏まざるに、計らざりき、意外の大惨事を聞かんとは。

多く得たる紹介状の中に、別子鑛業所の林學士籠手田彦三氏へ宛てたるがあり。然るに同氏は、行方不明なりといふ事の新紙上に現はれたるを知り、然れども、是單に行方不明なりしならむと思ひ居りしに、住友家に縁故ある某氏の、船中の談に依りて、籠手田氏の十中八九は、死者の數の内にある可き事を知りて、我は言ふ可らざる一種の無常觀を生じぬ。

氏の異状なからむには、我は氏に依りて惨狀の視察を爲し得るに便なりしを。我は今、紹介せられたる宛名の人の惨死の様を、記せざるを得ざるに至らんかと思へば、未だ其人を見ず既に知己なりしかの如く思はれて、双眼涙無きを得ざりけり。

某氏は籠手田氏の親友なり、在新居濱なる籠手田氏の家族より、災害の當日氏は山中に入りてありしが、今日まで消息を聴かず、多分石ヶ山丈

の死者七名の内ならむとの打電に接し、取る物も取り敢ず、急に赴くなりど。語る音調は打顫ひてありき。

あはれ籠手田彦三氏、九死の内に一生涯の天幸を得てあれかしな。我深く災害地に入りて、若し死せる氏に紹介状を出すの惨劇に遭遇せば、我は迎も耐へまじきぞ。

鑛山に關係ある某氏は語りて曰く、我先年、別子銅山の最高所にて暴風雨に會したりき。其激甚猛烈なる、迎も下界の人の想像し得べきにあらず。石を吹飛ばすが如きは、決して不思議とするに足らざるなり。今回の災害も、恐らくは其時の模様と大差はなかる可し。元來同山は人も知る如く、突兀たる岩石のみにして草木毫もあらず。岩角より岩角へと岩を疊上げて、所謂大神樂立の趣きあれば、一朝其天邊よりか、或は其下層よりか、蟻の一穴程の崖崩れあらむには、全山悉く崩壊するなり。彼の北越の『松すべり』と稱する一種の大雪類が、山頂にては松の枝より

落ちたる小雪塊なるに、轉々として落下する内には非常なる大雪類となりて、人家を破壊するが如く、山頂の一小石が轉落すれば、將基倒しに大岩石の總崩れとなるやに見え居れば、今回或は其不幸なる大すべりを演じたるにはあらざるか云々。

第三報 (九月二日新居濱にて認む)

木津川丸は四坂島に寄港したり。此所は四個の無人嶋より成れるものなりしが、彼の烟毒事件の爲、住友製錬所を此所に移轉するの計畫にて、今は人夫千餘名入込み、盛んに工事中、今回の大惨劇に會して、別子の方に入夫の欠乏を感じたるより、流用して此方の入夫を引揚げ、殆ど工事は休止の傾きなりといふ。木津川丸の寄港したるも、人夫搭載の爲にて、五十餘名の石工を乗船せしめぬ。

それより方向を轉じて、今治へ又寄港したり。此所にては、白米、干鰯、草履、蕨、苔、漬物、蠟燭等、積み得らる、だけ積込んで居たりしが、

小雨に微風如はり、何となく天候不穩の兆の如くに見ゆるのみか、現に海岸には、警戒の信號出で居れば、半にして中止し、逃るが如く出港し、新居濱の沖遙かに投錨せしは、實に午後八時廿分なり。

木津川丸は、元來尾ノ道新居濱間の定期航海船なりしも、今回の事件後、臨時船と爲りて、諸港より食品及び雜品を運送する任務に當り居るより、二十八日以後は、船員殆ど徹夜にして航行に奮勵し居れり。

今茲に船長事務長及び船員諸氏より聞きたる談片を列記して、以て其慘狀の一斑を讀者に報せん。

▲米の持ぐされ 寶の持ぐされと同じ事です、玄米は澤山あるのださうですけれど、水車場が悉く押流されたので白米が一ツもありません。夫れで此通り尾ノ道や今治から輸送するのです。

▲食品の大欠乏 尾ノ道と今治との、有ると有らゆる罐詰物を皆買集めました。昨日大阪から二百行李計り罐詰が廻りました。別子では鍋

釜が皆流されたり埋れたりして、米が有つても如何する事も出来ませんから、尾ノ道と今治とで有るだけ買集めて持つて行きました。鐵氣が抜けて居ないので、夫れを製鍊所で急に抜くやら、いやもう大騒ぎでした。

▲草鞋の大欠乏 これも亦同様です、尾ノ道にも今治にも最う一足も有りませぬ。大阪へ電報で五萬足から注文したさうです。

▲死屍海上に漂ふ 新居濱の鎔鑪の沖で、五個六個浮いて居るのを、昨日(三十一日)見ました。何んでも國領川の水が溢れて、新居濱の本村の方では田の中へ死骸を押流したといふ事です。

此他山上の慘狀に關して、種々聽きたるも、後に一括して記す可し。扱、我は木津川丸より解船に乘移り、殆ど半里以上もある海岸まで五十分以上を費して送られたり。此間、暗夜の海上に、海月の光るを幾個となく認めて、是、慘死者の漂へるにはあらぬかと疑はれ、あまり快き感生

せざりき。上陸して旅舎を求むるに、泉壽亭といふは満員にして、拒絶を蒙り、止むなく雨中を彷徨して漸く桑川といふに入り、低頭平身して泊する事を得たり。

今朝(二日)未だ住友の事務所を訪問せざれど、別子より下山したる人、及び人夫と爲りて登山して歸りたる人、其他旅舎の主婦等に就きて聞き得たる慘話を記すれば。

▲人心競々 として殆ど鎮定に策無きが如し。三十一日の午前十一時までに大崩壊の再發なくんば、三日以内には必らず第二の大災害來る可しとて、山神のナンコウ様の御神告ありたりと、無智の坑夫間に喧傳し、下山又下山、昨日の如きは非常なりしといふ。殊に山岳時々鳴動するより、人夫なども一圓の日給よりは命の方が欲しいとて、應ずる者少しといふ。

▲山下の鐵道 は漸く復舊して、運轉を開始爲し居るも、山上の方は

非常の大破損にて、當分開通の見込無しといふ。

▲今日の急務 は死骸の發掘よりも、糧食の運搬にあり。山上六千餘の人を餓死せしむ可からずとて、辛じて過ぎ得べき程の路を通じ、人夫の背をかりて、米鹽を運び居る程なれば、山に行くには如何なる人たりとも、一人一升の白米を携帶せざれば登らしめずと。

▲恐らくは山海嘯ならむ といふ説あり、雨量如何に多ければとて、平地ならぬ高地の家を、押流される程には至らざる可きを、と言ふ人あり。又委しく同山の地形を知る人は、語りていふ。元來同山は人も知る如く、人家などを建て得らる可き所にはあらざるを、無理に階段風に地を切開きて家の半分は張盤の上に出で居れば、若し張盤の支柱にして倒れんか。恰も家は柵落しの如く轉覆せんと。(張盤とは地面の不足の爲、板を柱もて支へながら、張出しを造れるなり。全山十の八九までは此危き張盤ならざるはなかりしと)

▲進退全く谷まる 暴風雨の當時、山上に在りて生存したる某技師の談に、二十八日の午後八時九時頃が最も激烈にして、家の中に居ても危く、外に出れば益々危く、全く進退維谷まりしといふ。

▲家内に在れば 家と共に押流されて死し。

▲屋外に出れば 岩と共に押流されて死す。

▲いづれにしても 助かりたるは稀なるも、家内にて死したるは、多くは死屍を發見し得るも、屋外に出でたる人の死屍は、土砂に埋めらるゝか、濁水に流されるかして、發見甚だ少く。たまたま有りとするも、岩石に四肢を摩擦されて、目も鼻も口も何が何やら分らぬ様になり、二里も三里もある山の下、意外の邊に押出されてあれば、誰が誰やらといふよりも、寧ろ人なるや獸なるや、其判別に苦しむ程なりといふ。

▲死傷者 死者多くして、傷者の割合に少きは、傷を負ふ如き場合に

居たる人は、逆も活路の無き譯にて、傷者即 死者と見て差支無しとなり。

▲最も慘狀を極めしは 見花谷と兩見谷となり、之に次ぐは小足谷なり。

▲死者に少年多し 平素は松山、又は高松等の學校に遣り居りたる少年の、暑中休暇に引續きて滯山したる者少からざりしが、是等は皆死者の數に入りたりとは、眞に酸鼻に耐へずといふ可し。

第四報 (九月二日新居濱にて認む)

▲噫籠手田彦三氏 同氏の居宅は新居濱に在り。然れば家族(夫人ジュン子(二十)令嬢エイ子(三)及び下婢某)は素より無事なりしも、氏は山林巡視の爲め別子銅山に登りて、彼の災害に遭遇し、終に不歸の客となりしこそ悼しけれ。當夜は、小足谷俱樂部にて、豫て好める玉突を爲し、三ゲームにて止め、人々の留るをも聽かず、小足谷なる旅宿

に歸らんとして、終に行方不明とはなりけり。然るに、玉突場たる俱樂部には異状なくして、此所に留りたる人々は皆恙なかりじといふに至つては、誠に氏の非違なりしを悲しまざる可らず。而て、其死屍は、吉野川に落ちて、徳島の方に流れたるならんと、其方面に向ひて今猶搜索中なるが、氏の洋服を一昨日に至りて、漸く發見したりといふ。そは、下の方に水車場ありて、固より小屋の全部は影もなく流失したるも、水車の心棒は堅牢に建てられありしを以て、之のみ地上に突立ちたるに、其上方より押流されたる家屋の引掛りて、一部は此所に留りたる中を、何かあるとて探りたる時に、見出したるものなりといふ。されども、氏は玉突場を出でたる時は、和服なりしといへば、洋服を發見したりとて死屍とは甚だ縁の遠き感あり。さりとして、他に筐とす可き物もあらねば、其洋服は新居濱の夫人の下へと送附されたり。夫人の悲歎は誠に察するに餘りある事にして、聴くに涙の種ならぬはあ

らねど、夫人は今春嚴父なる籠手田安定氏を喪ひ、今又最愛の良人に不時の變ある事、此上の不幸は非ざる可し。夫人は故安定氏の四女にして、令姉の一人は、郷里に在り。一人は在天津の陸軍大尉某氏に嫁し、一人は元新潟縣の參事官にして、現時は臺灣に在る大津林平氏に嫁し、令弟は陸軍砲兵中尉にして、名古屋に在りといふ。初め籠手田氏の計報、新居濱に達するや、之を夫人に告ぐる事に就きて、鑛業所の役員には非常に苦心し、若し變を報じたる爲、夫人に劇しき感動を與へて、萬一の事ありてはと、注意の上にも注意を加へて、それとなく遠廻はしに告げたるに、夫人は健氣にも豫め覺悟ありて、更に取亂したる態はなかりしといふ。然れども、未だ生死判然せざる時に、夫人は單身意を決して、如何に道路の破壊し居るとも、是非に登山して、良人の行方を搜索す可しと主張して、中々に引留め難かりしを、百方人々の押しなだめて、其代りに下婢の某を登山せしめたりといふ。